

金沢大学 タウンミーティング in 金沢

地域と大学の連携による、
世界の「交流拠点都市金沢」の実現

平成 26 年 2 月 15 日(土)
金沢学生のまち市民交流館交流ホール

開会あいさつ

横山 壽一

金沢大学地域連携推進センター長 教授

本日はタウンミーティングにご参加いただきありがとうございます。大学と自治体の共同開催事業であるこのタウンミーティングは、大学と地域とが連携してお互いに膝を交えて議論を進める中で、大学が地域の中で果たすべき役割や連携の進め方を探っていくものであり、できれば具体的なプロジェクトを立ち上げて推進していくきっかけにしていこうと取り組んできました。平成14年に輪島市から始めて、今回で13回目の開催になります。これまでにタウンミーティングを開いた自治体とは、その後には包括連携協定を結び、さまざまな連携事業を進めていくというスタイルを取ってきました。

金沢市とは既に締結されている包括連携協定の下に多くの連携事業を進めてきており、さらに年に一度連携推進会議を開催し、事業の推進に向けて協議の場を持っております。現在は、10プロジェクト、30以上の事業が連携事業として取り組まれています。タウンミーティングは初めての開催になります。金沢大学はこのたび、「地（知）の拠点整備事業（COC事業）」に採択され、金沢市にも連携自治体の一つとしてご協力いただくことになっているため、このタウンミーティングを新たな地域連携の再出発の場にしたいと思っています。



そのような経緯から、今、金沢市が新しいまちづくりのコンセプトとして取り組んでいる、世界の「交流拠点都市金沢」をテーマに据え、金沢市が抱えるさまざまな課題を議論できるような場にしたいという思いから、ディスカッションの中身を設定しました。金沢市との推進事業の一つである学生のまち推進プロジェクトにならい、今回のタウンミーティングは、学生も参加するまちづくりもテーマに議論していければという思いから、金沢学生のまち市民交流館を会場に設定しました。今日のタウンミーティングが、金沢市と金沢大学とのさらなる連携の出発点となるよう皆さまのご協力をお願いして、ごあいさつとさせていただきます。

開会あいさつ

相川 一郎
金沢市都市政策局長

タウンミーティング in 金沢にご参加いただき誠にありがとうございます。このタウンミーティングを開催していただきました金沢大学様、ご参加いただきます先生方に感謝申し上げます。

金沢市は金沢大学と最初に連携協定を結ばせていただき、学生方や先生方のお知恵を頂きながら、広く深くさまざまな事業を進めてきました。特に、文部科学省の「地（知）の拠点整備事業（COC 事業）」においては特に地域の連携がキーワードになると思っています。そしてこれは行政のみならず、学生や市民の方々、いろいろな立場の方々がそれぞれの立場で考えることが大切です。

金沢市は、世界の「交流拠点都市」を都市像として掲げ、今年度はそれを施策に反映させていくための重点戦略計画を策定しており、今年3月の当初議会でその案を出す予定で進めています。計画案は毎年度ローリングしていくつもりですので、頂いた意見を反映させながら、市民の方々と一緒に進めていく体制を取っていきたいと考えています。今まで、歴史都市、創造都市として進めてきたまちづくりを、これから先、新しい刺激を頂きながら「交流」をキーワードにして進めていく先に、一体どのような新しいまちが出来上がるのか。その姿を思い描きながら進めていきたいと思えます。市民が安心して暮らせるまちづくりを目指していくためにも、大学の先生方や学生の方々、若い方々のお知恵やお力を頂きたいと思えますので、今後ともよろしく願いいたします。



タウンミーティングのこれまでの流れと趣旨説明

横山 壽一

金沢大学地域連携推進センター長 教授

金沢大学は、大学憲章前文で「地域と世界に開かれた教育重視の研究大学」を理念として掲げています。その大学憲章の下に、2010年に金沢大学アクションプランを策定し、地域連携の基本方針を定めています（図表2）。そこでは、リージョナルセンターとしての役割を果たすこと、地域経済の振興や活性化に寄与していくこと、地域との連携を強化して地域活性化を目指した提言や情報発信に努めていくことをうたっています。そうした地域連携事業の窓口となり、大学の社会貢献を推進する組織として位置付けられるのが、金沢大学地域連携推進センターです（図表3）。センターには地域連携部門と生涯学習部門があり、生涯学習や地域連携事業を通して地域貢献活動を進めています。

タウンミーティングは地域連携推進センターが担っている重要な事業の一つで、地域と大学が膝を交えて議論する中で出てきた地域の課題や大学への期待に対し、大学が持っている資源をどう生かせるか考えていく場として位置付けられています。同時に、市民と研究者が同じ立場で地域の課題について考える場であり、地域課題の解決につながる事業を立ち上げて推進するきっかけをつくる場でもあります（図表4）。

平成14年度に輪島市で始まり、今回13回目を迎えたこのタウンミーティングは、共同開催する自治体と協議しながらテーマを設定し、具体的な話し合いを進めてきました（図表5）。タウンミーティングをきっかけに、各自治体と包括連携協定を締結し、連携事業を包括的に推進していく体制をつくり、実際に多くの事業が立ち上がってきました（図表6）。例えば、珠洲市とのタウンミーティングをきっかけに、能登各地を拠点とした能登里山里海プロジェクトが立ち上がり、大きな成果を生みました。また、小松市とのタウンミーティングでは、木場潟の水質改善プロジェクトが立ち上がりました。これは、ミーティングの場に出された具体的な問題に対して、大学側が対応策を示し、プロジェクトとしてすぐに動きだした例です。その他にも、タウンミーティングで出されたさまざまな課題がきっかけになり、プロジェクトとして動いている例は多数あります。

私たちは、こうしたタウンミーティングに大学が取り組むきっかけともなったCOC事業への取り組みの中に、タウンミーティングを積極的に位置付けて進めていきたいと考えています（図表7）。COC事業では、教育、研究、社会貢献という三つの部門を設け、それぞれの事業を進めながら、全体として地域貢献を進めていく、またその中で地域志向を持った学生を育成していくことを課題として取り組んでいます。そう考えると、金沢市と取り組んでいる学生のまち推進プロジェクトをはじめとする学生参加のまちづくりは、大変大きな意味を持つ事業であると言えます。また、今日これから議論していただく課題は、それぞれの部門に全体として関わってくる重要なテーマだと思えます

今回は、世界の「交流拠点都市金沢」の実現というテーマで取り組みます（図表8）。これまでのまちづくりの基本を受け継ぎながら、人、物、情報の交流を集積していく中で新しい価値をつくり出し、持続的に発展していくまちを目指していきます。その中で生じる課題に対応していくための議論をしていきたいと思えます。具体的に設定したテーマは、「まちづくり」「国際交流」「学び、福祉、地域の

支えあい」「学生のまちづくり」の四つです。これを柱として話題提供をしていただき、皆さんと議論していきたいと思います。この中で、既に成果を挙げている事業も数多くありますが、さらに今日の話し合いの中で、皆さまから積極的なプロジェクトの提案をしていただき、また新たなプロジェクトが動きだしていく場にしたいと考えています。

タウンミーティングの進め方

司会 ありがとうございます。それでは、これから四つのテーマについて話題提供をしていただきます。その前に、今回のタウンミーティングの進め方について説明します。今回はできる限り皆さま方のご意見を頂戴できればと思い、いろいろと仕掛けをしています。前半は四つのテーマの話題提供、後半にはワークショップでの意見交換をしていきます。

前半の話題提供の時間には、そのテーマに関して思うことについて、机の上の四種類の付箋紙に、日ごろから不満に思っていることや問題点だと感じていること、課題と思うことなどを自由に簡潔にお書きください。不満や課題については、付箋紙の左上に①と分かりやすく付けておいてください。また、①で記入した課題の解決案や理想像も自由にご記入ください。話題提供者への質問については、紙の左上に②とご記入ください。

4種類の付箋紙の使い分けについてご説明します。赤がまちづくり、緑が国際交流、黄色が学び、福祉、地域の支え合い、青が学生のまちづくりです。もちろん何枚書いていただいても結構ですが、全部のテーマについて書くのは難しいかもしれませんので、目標として自分が選んだテーマについては最低限2枚以上書いてください。皆さんの名札がそれぞれご自分で選んだテーマの色になっています。自分のテーマ以外の三つについては、関心があると思うテーマについては1~2枚書いていただければと思います。後半のワークショップではそれらの付箋を題材にして意見交換を進めていきたいと思っています。それでは、話題提供に移ります。

タウンミーティングの これまでの流れと主旨説明

金沢大学タウンミーティングin金沢

2014年2月15日(土)
金沢学生のまち市民交流館交流ホール

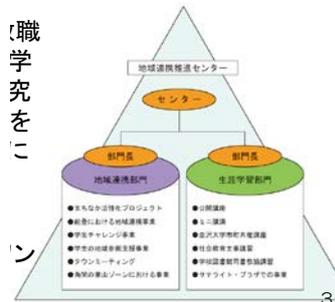
金沢大学の地域連携の基本方針 金沢大学アクションプラン2010

1. 北陸の基幹大学として、地域における責務を果たし、リージョナルセンターとしての役割を果たす。
2. 知的財産の活用により産学官連携のもと地域経済の振興、活性化に寄与する。
3. 地域との連携を強化し、地域社会の抱える行政、教育、医療等の問題解決に寄与し、地域活性化を目指した提言と情報発信に努める。



金沢大学地域連携推進センター

地域と大学をつなぎ、大学の社会貢献を推進する機関



タウンミーティングの趣旨

- 地域との対話を通じて、大学が地域に果たす役割を考える場
- 市民と研究者が同じ立場で地域の課題についてともに考える場
- 地域課題の解決に向けて地域と大学との連携をより深める場



これまでのタウンミーティング開催一覧

回	自治体	実施年月日	タイトル
1	輪島市	H15.1.24	地域が大学に望むこと
2	加賀市	H15.2.7	地域が大学に望むこと
3	鶴来町	H15.12.15	手取川流域のあした
4	珠洲市	H16.11.18	珠洲の活力と大学の知を結ぶ
5	能登町	H17.3.4-5	能登の自然と文化を活かすために
6	羽咋市	H18.12.1	地域と大学、連携する未来
7	穴水町	H19.12.4	震災復興から始まるまちづくり
8	内灘町	H20.12.20	地域の支えあい、協働によるまちづくり
9	能美市	H21.12.19	自然とくらしが調和した環境のまちを目指して
10	七尾市	H23.3.5	人口減少時代の豊かな暮らしを目指して
11	小松市	H23.12.3	世界とつながるハーモニシティを目指して
12	野々市市	H25.1.27	ともに創りともに育む住み続けたいまちづくり

タウンミーティングの主な成果(例)

- ◆ 自治体との包括連携協定
金沢市、小松市、能美市
七尾市、輪島市、珠洲市、穴水町、能登町



- ◆ 能登学舎を拠点とした能登里山里海プロジェクト
- ◆ 小松木場潟水質改善プロジェクト

金沢大学のCOCへの取り組み



金沢市政の目指す新しい都市像

世界の「交流拠点都市金沢」の実現
～市民が創る誇りあるまち～



タウンミーティングin金沢のテーマ

地域と大学の連携による、
世界の「交流拠点都市金沢」の実現

- ◆まちづくり
- ◆国際交流
- ◆学び、福祉、地域の支えあい
- ◆学生のまちづくり

金沢大学と金沢市との連携による地域協働プロジェクトの可能性を検討



中心市街地活性化とまちづくり～街の魅力とは？～

高山 純一

金沢大学理工研究域環境デザイン学系 教授

今日は、中心市街地活性化について話したいと思います。まず、なぜ中心市街地活性化が必要なのか、あるいは、街の魅力とは何かを考えてみます。魅力があれば当然人が集まり、そこが街になり、にぎわいが生まれますが、では魅力とは一体何でしょうか。人が考える街の魅力は十人十色ですから、少し仕分けをして考えなければいけないと思います。



今日の話は、大きく四つに分かれます。一つ目は「街の魅力とは?」、二つ目は「まちづくり」の考え方とその必要性、三つ目は金沢市における中心市街地活性化、四つ目が「大学」と「まち」の関わりです。まず、街の魅力についてですが、住んでいる方と他の土地から来る方では、街の魅力についての視点は異なると思うので、それについて最初にお話しします。次に、まちづくりとは誰がするものなのかについてお話しします。行政だけでできるものではないはずですが、しかし、ハードやソフトの整備などの基本は、行政がある程度青写真を描いた上でやっていく必要があります。個人個人がてんでんばらばらのまちづくりをしてしまうと統一性が取れないため、良いまちをつくる

ことはできません。そこで、基本的なまちづくりの考え方と、現在金沢市が考えている方向性、そして今回は特に中心市街地活性化の考え方を紹介したいと思います。そして最後に、大学の役割や学生とまちの付き合い方についてお話しします。

私は昭和48年に金沢大学に入学したので、お城の中で学んだ1人です。当時は休講になるとすごく嬉しくて、すぐに坂を下りて麻雀をしにいったことを覚えています。しかし、今の学生は山の中にキャンパスがあるので、街に出ようと思うと少なくとも30分はかかります。真面目なのがいいのか遊び人なのがいいのかは分かりませんが、そういう意味では気の毒に思います。最近の学生の気質や街との関わりについては、学生が授業で調べたアンケートの成果をご紹介します。どこに課題があるのかということをご一緒に考えてみたいと思っています。

1. 街の魅力とは何なのか

まず「街の魅力」については、住んでいる方と来街者の目は違うと思います。住んでいる人にとって何より大事な街の魅力とは、やはり住みやすさや暮らしやすさだと思います(図表3)。住みやすさ、暮らしやすさとは、まず、働く場、学ぶ場、遊ぶ場があることだと考えられます。また、いつも元気とは限りませんし、人は年を取りますから、医療や福祉、介護も大事です。もちろん地域によっては

食べ物もかなり違いますので、食文化も大事でしょう。北陸は冬は特に美味しいものが多いと言われる。また、住環境も忘れてはいけません。子育ての面からも、うさぎの寝床では窮屈なので、ある程度大きな家に住めるのかどうかという問題も出てきます。そしてやはり、交通環境、都市交通も非常に大きな問題です。渋滞のために1~2km先に行くのにも20~30分かかかるようでは不便です。このようなそれぞれの要因が良くなければ、暮らしやすいまちとは言えません。そして最終的には、もちろん、街に対する誇りも非常に大切だと思います。

では、観光客のような、外からの視点ではどうでしょうか(図表4)。行ってみたい、住んでみたいと思える街は魅力的だと言えます。観光客であれば、見るもの、食べるもの、遊べる場所、お土産などもその街の魅力に関わってきます。もちろん先ほど述べた交通の問題も重要な視点です。その街で楽しめるかどうかが一番大事なことだと思います。

金沢大学の卒業生の1人が勤務しているブランド総合研究所では、ここ5~6年の都市の魅力度をいろいろな指標で集めてランキングしています。ご存じの方もいらっしゃるかもしれませんが、金沢市は、昨年は9位でした。800弱の市、自治体の数でいうと1700くらいありますので、その中でトップ10に入るのはすごいことだと思います。そう考えると、街のブランドイメージも非常に大事だと思います。

では、金沢市はまちづくりをどのように考えているのでしょうか(図表5)。金沢市では「都市計画マスタープラン」をつくっています。20年くらい先の都市の青写真を描いていると言えば分かりやすいかもしれませんが、そこにはいろいろな視点があります。まちづくりにおいては、まず、住宅地や商業地域、工業団地をどのように配置するのかといった土地利用の問題があります。また、都市にはいろいろな施設があるので、道路、鉄道、バス、上下水道、公園の配置や規模、水準の問題もあります。それから、当然ながら見た目も大事なので、歴史的景観や都市計画、自然景観といった景観整備の問題もあります。もちろん、防災・減災の観点も重要なテーマの一つです。

その中でも、金沢市は、「まちなか」と呼ばれる中心市街地を重点地区と呼び、そのまちづくりもきちんと掲げています(図表5)。にぎわいをどうつくっていくのかということです。生活に根付いた金沢の「ほんもの」づくり、古いものと新しいものが調和する金沢の新たな「みりょく」づくり、やさしさと親しみに満ちた金沢の「もてなし」づくり。昨年の暮れに、「お・も・て・な・し」がブレイクしましたが、金沢ではかなり前から「もてなし」力というものを魅力づくりの一つのテーマに掲げています。

具体的には、「中心市街地活性化法」という法律の中で、「金沢市中心市街地活性化基本計画」という5カ年計画をつくりながら、五つの項目に沿って街づくりを進めています(図表7)。今は、1次計画が終わり、2次基本計画に進んでいます。これは平成29年まであります。1次計画と2次計画を比較しても、内容はほとんど変わりません。例えば(2)は、1次計画では「中心市街地の良さを活かした住環境づくりの推進」と書いてありますが、2次計画では、「快適で潤いのある住環境の整備」と表現されており、言葉を少し変えてありますが、内容はほとんど変わりません。

ここで掲げている目標は、先ほどの五つの項目の(1)と(2)をまとめて、誰もが暮らしやすい中心市街地をつくろうという目標、(3)と(4)については、にぎわいと交流が生まれる中心市街地をつくろうという目標、最後に、人と環境に優しい交通体系の確立という意味で、過度に自動車に依存しない市街地をつくろうという目標を掲げています(図表8)。これが金沢市の中心市街地活性化の基本

計画です。

2. 「大学」と「まち」の関わり

次に、金沢と大学の関わりを考えてみます。若者が街中に集い遊ぶと、にぎわいが出てきます。ホームページで調べたデータなので必ずしも正しいかどうかは分かりませんが、現在、金沢大学には学部生と大学院生（社会人を含む）を合わせて1万人余りの学生が在籍しています（図表9）。もちろんその全員が金沢市内に住んでいるわけではなく、周辺地域やもう少し遠い地域から通っている方もいます。幽霊会員のようにほとんど大学に出てこない社会人ドクターもいますが、それでもかなりのボリュームの学生がいます。金沢工業大学も大きく、7000人余りいます。その他の学校は1000～2000人規模なので、全体で2万7000人程度の学生がいるということです。これは非常に多い数です。

金沢大学、金沢学院短期大学（旧 金沢女子短期大学）、そして美術工芸大学の三つは、以前はほとんど街中にありましたが、今は郊外に移転しています。もちろん学生定員が変わっていますので、これだけの数の人間が街中からいなくなったとは言いませんが、やはり少し少なくなった感はぬぐえません。

金沢大学の中山晶一朗准教授が指導された3年生のレポートの中から、金大生の買い物や遊びの動向を調べたものを示しました（図表10・11）。調査人数は150人なのでそれほど多くはありません。その中から7割弱の学生が回答してくれています。これを見てまず驚いたのは、あまり片町の飲食店へ行かないということです。週1回行くと回答したのはほんの3%です。月1回という回答が3割少し、2カ月に1回を含めても8割くらいにしかありません。さらに驚いたのは、行きたいけれど行けないという回答が2割弱もあったことです。

また、街中に行く交通手段はほとんどがバスでした。安いからというのがその理由ですが、帰りは残念ながらバスがないためにタクシーです。平成23年度に金沢市が、まちなか夜間学生バスを無料で運行してくれました（図表12）。夜中の12時くらいに香林坊を出発し、大学近辺を回ってくれます。金曜日と土曜日だけで全22日間でしたが、1日当たりの利用者は19人で、1台のバスにしては利用者が少なかったこともあり、残念ながら今は廃止になっています。

もう一つ面白い取り組みとして、まち飲みラウンドというものがありました（図表13）。3000円の費用で、街中の飲食店を3軒回れるというものです。1軒目は居酒屋、2軒目はバー、3軒目はラウンジです。買い物をする場所としては、女子は多くが駅周辺、男子は駅や香林坊でした（図表14・15）。男性と女性では少し違いますが、それでも頻度でいえば、どちらも月1回程度しか行っていませんでした。あまり街中には行っていないという印象を受けます。香林坊にもあまり行っていません（図表16）。別の調査でも、やはりあまり行っていないことが分かります（図表17）。どこに原因があるのかについてはこれから皆さんで議論していくことなのですが、行かない理由としては、男性は行く暇がない、女性は興味のある店がない、無料の駐車場が少ないということが挙がりました。

では、どうやったら行くかという問いに対しては、無料の駐車場があるとよい、あるいは便利なバスをつくったらよいという学生の声が上がってきました（図表18）。恐らくこれは、これからの街づくりを考える上で、街中へ学生を呼び込むための一つのヒントになるのではないかと思います。



「中心市街地活性化とまちづくり」 ～街の魅力とは？～

金沢大学 環境デザイン学系
教授 高山 純一

目 次

1. 「街の魅力とは？」
2. 「まちづくり」の考え方とその必要性
3. 金沢市における中心市街地活性化
4. 「大学」と「まち」の関わり
5. おわりに

2

1. 「街の魅力」とは？

内からの目(住民の視点)

外からの目(来街者の視点)

1. 「街の魅力」とは？

「内からの目(住民の視点)」

住みやすさ(暮らしやすさ)……日常

- 働く(労働環境)
- 学ぶ(教育環境)
- 遊ぶ(遊興娯楽)
- 憩う(医療・福祉・介護)
- 食べる(食文化)
- 住む(居住環境)
- 動く(交通環境)

「まち」に対する誇り

1

3

4

「外からの目(来街者の視点)」

行ってみたい・住んでみたい……非日常

- 観る(歴史・伝統・文化・自然・祭り)
- 食べる(食文化)
- 遊ぶ(遊興娯楽・観光体験)
- 買う(土産物・農林水産物・伝統工芸品・現代アート等)
- 動く(交通環境)

そのまちで楽しめるか！

「まち」に対するイメージ(ブランド)

2. 「まちづくり」の考え方とその必要性

「内からの目」と「外からの目」の両方が必要

金沢市における「まちづくり」の基本的な考え方

○『都市計画マスタープラン』

- 土地利用(住宅、商業、工業、農林水産業等)
- 都市施設(道路、鉄道、バス、上下水道、公園等)
- 景観整備(歴史的景観、都市景観、自然景観等)
- 防災・減災(安全・安心)

○『重点地区(中心市街地)』のまちづくり

- 多様な人が住まい、営み、交流する金沢の「にぎわい」づくり／
- 生活に根付いた金沢の「ほんもの」づくり／
- 古いものと新しいものが調和する金沢の新たな「みりょく」づくり／
- やさしさと親しみに満ちた金沢の「もてなし」づくり

5

3. 金沢市における中心市街地活性化

「金沢市中心市街地活性化基本計画」

認定「1次基本計画」(平成19年5月～平成24年3月(4年11ヶ月))

○『中心市街地の活性化に関する基本的な考え方』

“～人が住まい、集い、にぎわう、元気な中心市街地を目指して～”

- (1) 古いものと新しいものが調和する美しいまちづくりの推進
- (2) 中心市街地の良さを活かした住環境づくりの推進
- (3) 魅力ある商店街とにぎわいあるオフィス街の形成
- (4) 多様な人々が集う交流活動の推進
- (5) 歩行者、公共交通を優先したまちづくりの推進

6

3. 金沢市における中心市街地活性化

「金沢市中心市街地活性化基本計画」

認定「2次基本計画」(平成24年4月～平成29年3月(5ヶ年))

○『中心市街地の活性化に関する基本的な考え方』

“～人が「住まい」、「集い」、「つながる」場所であること～”

- (1) 古いものと新しいものが調和する美しいまちづくりの推進
2次基本計画・伝統と創造による個性あるまちづくりの推進
- (2) 中心市街地の良さを活かした住環境づくりの推進
2次基本計画・快適で潤いのある住環境の整備
- (3) 魅力ある商店街とにぎわいあるオフィス街の形成
2次基本計画・魅力と活力のある商業環境の形成
- (4) 多様な人々が集う交流活動の推進
2次基本計画・国内外との多様な交流活動の促進
- (5) 歩行者、公共交通を優先したまちづくりの推進
2次基本計画・人と環境に優しい交通体系の確立

7

3. 金沢市における中心市街地活性化

「金沢市中心市街地活性化基本計画」

8

認定「2次基本計画」(平成24年4月～平成29年3月(5ヶ年))

○『中心市街地の活性化の目標』

- (1) 伝統と創造による個性あるまちづくりの推進
- (2) 快適で潤いのある住環境の整備
目標1:誰もが暮らしやすい中心市街地
- (3) 魅力と活力のある商業環境の形成
- (4) 国内外との多様な交流活動の促進
目標2:賑わいと交流が生まれる中心市街地
- (5) 人と環境に優しい交通体系の確立
目標3:過度に自動車に依存しない中心市街地

出典:2012年3月 認定「2次金沢市中心市街地活性化基本計画」:金沢市HP

4. 「大学」と「まち」の関わり

4. 「大学」と「まち」の関わり

9

表 1 金沢市ならびに周辺市町に立地する高等教育機関の学生数

	学生(在籍者数)	大学院生(在籍者数)	合計
金沢大学	7,968	2,362	10,330
金沢工業大学	7,043	412	7,455
金沢学院大学	1,750	46	1,796
金沢学院短期大学	240	-	240
金沢星稜大学	2,230	19	2,249
金沢星稜短期大学	240	-	240
北陸大学	2,142	-	2,142
北陸学院大学	486	-	486
北陸学院大学短期大学部	263	-	263
金沢医科大学	943	-	943
金沢美術工芸大学	641	84	725
石川県立大学	556	39	595
合計	24,502	2,962	27,464

出典:各大学のHPより作成(平成25年5月1日現在)

4. 「大学」と「まち」の関わり

金大生の買い物・遊びの動向

10

平成23年度 環境デザイン演習の調査結果
メンバー:石井・大島・勝間田・中川・藤山
(指導教員:中山晶一朗准教授)

学生 150名中103名の回答(回収率68.7%)

片町の飲食店へ行く頻度

週1回程度	3%
月1回程度	17%
2ヶ月に1回程度	35%
行きたくないor行けない	45%

金大生は、あまり片町へ飲みに行っていない

4. 「大学」と「まち」の関わり

金大生の買い物・遊びの動向

11

行きの交通手段

車	10%
自転車・徒歩	15%
タクシー	5%
バス	65%

行きの交通手段を選んだ理由

安い	50%
乗りたいときに乗れる	45%
移動時間が短い	10%
快適	5%
交通費がわからない	5%
バスがない	5%
その他	5%

帰りの交通手段

車	10%
自転車・徒歩	15%
タクシー	5%
バス	65%

帰りの交通手段を選んだ理由

安い	50%
乗りたいときに乗れる	45%
移動時間が短い	10%
快適	5%
交通費がわからない	5%
バスがない	5%
その他	5%

4. 「大学」と「まち」の関わり

まちなか夜間学生バスの運行

12

平成23年9月16日(金)～11月26日(土)
金・土曜日 24:00(香林坊発)・美大・金大・星稜大
周辺まで運行(学生:無料バス)

期間中の利用者数422人(全22日間)
一日当たりの平均乗車人数は19人

無料バスでの利用者数としては、少ない
本格運行は、かなり困難ではないか
.....利用者が少なく(廃止)

4. 「大学」と「まち」の関わり

まち飲みラウンドのイベント

13

まち飲みラウンド
費用(3000円)、
3軒を回ることが条件
(1軒目は居酒屋、2軒目はバー、3軒目はラウンジ)
(1軒につき、1ドリンク、1フードを楽しむことができる)

片町商店街振興組合が実施
今回で5回目(3日間で1,600人の参加)
前回は2,000人の参加

4. 「大学」と「まち」の関わり

金大生の買い物・遊びの動向

14

平成25年度 環境デザイン演習の調査結果
メンバー:島川・下田・新家・杉浦
(指導教員:中山晶一朗准教授)

学生 200名中135名の回答(回収率67.5%)

男子

かほく	3%
その他	4%
野々市	9%
金大周辺	28%
香林坊・片町	28%
金沢駅付近	28%
無回答	1%

女子

かほく	2%
野々市	3%
香林坊・片町	5%
金大周辺	8%
金沢駅付近	79%
その他	3%
不明	1名

女子:38名

4. 「大学」と「まち」の関わり

金沢駅周辺への来訪頻度

15

男子

その他	13%
無回答	5%
週3,4回	3%
月1回程度	59%
週1,2回	20%

男子:96名

女子

その他	11%
無回答	3%
週3,4回	5%
月1回程度	55%
週1,2回	26%

女子:38名

男女ともに、「月に1回程度」と答える割合が、半数以上であり、金沢駅周辺へ買い物や遊びに行く割合が多い女子であっても、来訪頻度は、それほど多くないことがわかる。

街中(片町・香林坊)への来訪頻度



男子と女子を比較すると、週に1、2回、あるいは週に3、4回、来訪するという割合が、男子の方が高いようであるが、ほとんど行かない、という学生が2割以上もいる。

街中へ行かない理由



男女で多少異なるが、「興味のある店が少ない」、「無料の駐車場が少ない」という理由が多くを占めている。

学生から見た街中の課題

- (1) 興味のある店をつくる。
例えば、
 - 1) 買い物の途中一息つけるような喫茶店
 - 2) 女性や若者が気軽に立ち寄れるような雑貨屋
 - 3) 価格帯が学生向けのショップ
 - 4) イベントを行ったり、勉強スペースとして活用できる無料貸し出しスペース
- (2) 無料(安い)駐車場をつくる。
- (3) 便利なバスをつくる。

おわり

金沢大学タウンミーティング
平成26年2月15日

- ◆ 金沢大学 環境デザイン学系
- ◆ 教授 高山 純一

大学を地域と結び世界に開く 大学を世界と結び地域に開く

八重澤 美知子

金沢大学国際機構 教授

今日は「大学を地域と結び世界に開く 大学を世界と結び地域に開く」というテーマで、大学に来ている留学生と地域の皆さまのことにしてお話します(図表1)。実はこの順序は、私たちの国の留学生政策の方針そのままの順序です。これは、コインの裏表です。大学を地域と結び世界に開くということは、留学生受け入れの初期の考え方です。初期の留学生受け入れは、送り出し国の人材育成という方向性で行っていました。ところが最近では、留学生という人材に、受け入れ国である日本の社会に貢献してもらおうという流れに変わってきています。この二つは表裏一体ですから、力点がどちらに置かれているかという問題になると思いますが、私たちは忠実な一公務員、一教員なので、政策の方針の通りにやってきました。このことを含めて、簡単にお話しさせていただきます。

最初に、地域がどれくらい多文化状況にあるかということをお話します。二つ目は、大学を地域と結び世界に開くということについて、受け入れや、なぜこのように地域を結んで留学生にさまざまなことを提供したのかという理由をご理解いただきたいと思います。三つ目は、大学を世界と結び地域に開くということについて、地域の国際化にどう貢献していくかという問題を取り上げます。そして四つ目は、これからの方向性について触れたいと思います。これは実は私もよく分からない問題なので、ぜひ市民の皆さまの力をお貸しいただきたいと思っています。

1. 地域の多文化状況



現在、金沢市内の大学・短大の外国人留学生数は1251名です。県全体では1562名です(図表4)。東日本大震災以降、留学生の数は実は少しずつ減っています。来日している留学生の総数13万7756名で、そのうちの1562名ということで、47都道府県の17番目に当たります。このデータは2日前に文部科学省から頂きました。出身国別で見ると、皆さんもご存じだと思いますが、中国が半分以上を占めています。次にベトナム、インドネシアです。この辺りになると、だいぶ様子が変わってきているので少し驚かれるかもしれません。そして、韓国、タイと続きます。

金沢市内の外国籍住民数は、金沢市全体の人口の約1%に当たります。県全体の外国籍住民は、2006年に1万人を超えました。

その中では、ご存じのようにアジア地域が最も多く、次にヨーロッパ、北米という順序です。留学生を出身地別に見てみると、圧倒的にアジアが多いことが分かります(図表5)。1年前のデータでは92.2%を占めており、現在ではさらにもう少し増えています。

2. 留学生の教育

留学生受け入れに関する経過を見ていきます。1983年、中曽根内閣のとき、留学生数を21世紀の初頭までに10万人にするという計画がありました（図表8）。これは結果として2003年に達成しましたが、それまでなかなか留学生が増えませんでした。そこで、必ずしも日本語ができなくても日本に興味を持っている学生を呼び込むことはできないだろうかということで、概ね1年以内という短期留学の形で、留学生を協定校などから受け入れる制度ができました。

私どもは従来、留学スタイルは学位取得型だけだと思っていました（図表9）。私の同級生にいた留学生もそうでした。学生としては比較的高齢の30代が多く、出身国の大学を出てから就職して、さらにステップアップのために日本に来るという形です。当然、目的は学位の取得なので、数年間滞在して研究中心の生活を送るため、日本のことはほとんど知らない学生が大多数でした。しかし、10万人計画達成のためには、日本体験型の留学生を呼び込む必要が出てきました。これは20代中心の比較的若い年齢層で、自分の出身国の大学に所属したまま、日本に留学します。多くの学生は文系の学部生です。

一昔前の留学生のイメージは、非常に真面目で、私たちが思わず手を差し伸べたくなるような苦学生でしたが、日本体験型の留学スタイルが出てきたことが、次の私たちのやり方につながっていきます。本学の学生の学び方のタイプとして、従来の学位取得型に日本文化体験型が加わってきました。私たちの大学では、日研生、KUSEPと呼んでいます。日本語日本文化研究生や金沢大学短期留学プログラムでの留学生が、日本に1年間滞在します。

このような留学生たちへの教育では、たった1年滞在するだけの学生たちに何を教えるかという問題が出てきます（図表11）。大学で教えるカリキュラムだけでは、せっかく日本に興味を持ってやって来た彼らのニーズに応えることができません。実は私は金沢出身ではありません。後から市民にさせていただいたのですが、そのとき、なぜこのまちはこんなにすごい文化力を持っているのだろうと思いました。その思いを金沢の人に伝えると、「そんなの当たり前じゃない？」と言われました。幸いにして、私たちの留学生センターの教員は全て金沢大学以外の出身者だったので、外からの視点で、私は、金沢の一つの日本文化体験プログラムがつかれると思いました。当時、金沢の人からは、こんなものは授業にならない、コースにもできないだろうと言われましたが、決してそうではありません。地元の人には分からないけれど、外から来た人には分かるものなのです。文化体験プログラムをつくるには地元の協力が必要でしたが、金沢はそれができる街でした。そしてさらに日本と日本人を知るためのチャンスにつながっていきました。

学習というのは、座学や実験室だけではなく、市民と接触し、自分の目で見て耳で聞くということがとても大事です。そこで私は、特に短期留学生の教育においては地域の教育力に期待しました。少し余談になりますが、留学生たちは「短い滞在ならば大都会に行きたいが、長く滞在するならゆっくり地方を味わいたい」と言いました。金沢大学は東京や大阪と比べると地方に属します。私は、金沢に来た1年滞在学生に対して、まず金沢を知ってもらい、それから次は都会に出てもらいたいと考えたのですが、どうもそれは私の思い違いでした。

タウンミーティングが始まった平成14年に、いしかわ金沢学というものができました（図表12）。私は当時、金沢の人は全員金沢のことをよく知っていると思って、この講座をつくりました。そして、

私たちのところに大都会の留学生たちを連れてきて、逆に金沢の学生たちを都会に送ればいいのではないかと考えたのです。しかし、そうではありませんでした。やりはじめると、金沢の学生たち、金沢で暮らす人たちも実は金沢の文化や伝統文化体験をしていないということが分かったのです。そこで、講義と体験の両面に重点を置いた文化体験プログラムを開発しました。ただし、これはあくまでも、金沢学というやり方でつくりました。初期のものも幾つか報告書がありますので、後で見ただければと思います。

これは、平成 14 年度につくったプログラムです（図表 13）。このときは 3 月 9 日～15 日まで 6 泊 7 日の集中講義を行いました。会場は金沢市のキゴ山を使いましたが、キゴ山の人が、こんなに長くキゴ山を使ってくれたグループは初めてですと言って喜んでくださいました。キゴ山はとても素晴らしく、3 月のこの時期に 1 日も傘を差さずに済んだほどお天気にも恵まれました。道コース、芸コース、町並み体験コースの 3 コースをつくりましたが、町並み体験コースが一番人気で、2 コースつくることになりました。それも私にとってはとても意外なことでした。

この加賀料理調理体験の写真は、平成 14 年度のものではありませんが、後ろを見るとわかりますように場所はキゴ山です（図表 14）。和太鼓体験も場所はキゴ山です（図表 15）。図表 16 は兼六園散策の様子です。私は、兼六園などは当たり前過ぎると思ってコースに入れずにいましたが、留学生たちからリクエストがありました。地元に住んでいると、意外に地元が分からないのです。灯台下暗しということでしょう。図表 17・18 は金箔貼り体験や染物体験の写真です。会場は湯涌にある市の施設です。イスラム圏からの留学生で、日本に来てまだ 1 日目だという人もいました（図表 19）。

3. 地域の国際化

留学生を受け入れる意味について整理をします（図表 20）。留学生を受け入れることによって直接違いを体験できることができ、次のステップにつながります。これは、日本人にとっても、大学にとっても、地域にとっても同じです。私たちが当然だと思っていることは、実は当然ではありません。ですから、一度外の視点を持って中を見るということは、その後の学習の動機付けや私たちの知的好奇心を限りなく刺激してくれます。また、地域はそれによって改善の余地ができます。

次は地域の国際化についてです（図表 21）。大学を世界と結び地域に開く、つまり、留学生の多様な文化というものを使って、日本社会の中で貢献してもらうということです。21 世紀の留学生政策に関する政府の提言では、2020 年までに留学生 30 万人の受け入れを目指しています（図表 22）。一方で、日本人の海外派遣は 2012 年では 5 万 8000 人だったので、2020 年までに日本人学生の海外送り出しを 12 万人にするという目標を文科省は掲げています。

留学生教育から見えてくるものとしては、大学での教育指導体制が挙げられます（図表 23）。私はここがとても大事だと思います。このような言い方は地域の方には大変申し訳ないのですが、教育のために地域のことを利用させていただいたことが、結果として地域貢献になったと思います。私はいつも、大学教員の一番の任務は、学生を真面目に教育することだと思っています。学生にたくさんの選択肢を与えて、自己決定できる力を養うことです。大学での教育指導体制から見ると、グローバリゼーションの中に放り込まれる次世代に必要な知識とスキルとしては、日本社会の特性、つまり日本と日本人の再発見が必要です。日本社会に特有な対人関係については、長くなりますので割愛します（図表 24・25）。留学生の出身国の言語や文化に触れるということについては、金沢市から支援

を頂いて行っている言葉と絵本読み聞かせのプロジェクトがあります（図表 27）。

地球市民への歩みについては、皆さまのお知恵をお借りしたい部分です（図表 28）。多文化共生社会の実現については、直接出会う機会と場の確保、「直接」「機会」「場」がキーワードになると思います。オール地域で、地域のいろいろな活動を上手にコーディネートして協働体制をつくれば、もっとさまざまな国際化に貢献できるのではないかと考えています。多文化と出会うことが相互理解につながり、平和な国際社会をつくるための一つの歩みになるのではないのでしょうか。そんなに簡単なことではありませんが、そうなるのではないかという信仰を持って仕事をしています。





大学を地域と結び世界に開く
大学を世界と結び地域に開く

2014. 2. 15

1

本論

- ①はじめに
地域の多文化状況
- ②留学生の教育； 大学を地域と結び世界に開く
留学生受け入れの経緯 / 留学生のタイプといしかわ金沢学の企画
- ③地域の国際化； 大学を世界と結び地域に開く
留学生と地域住民活動との協働プログラム
- ④地球市民への歩み
多文化共生社会の実現化

2

①地域の多文化状況



3

1、地域の留学生数の推移

金沢市内の大学・短大の外国人留学生数
1, 251人(2012年7月現在 / 1,562人 石川県全体)

中国 1,066 / ベトナム 136
インドネシア 58 / 韓国 46 / タイ 43

金沢市内の外国籍住民
4,606人(2012年12月現在 / 10,601人 県全体)

アジア 4,044 / ヨーロッパ 190 / アフリカ 50
北米 166 / 南米 122 / オセアニア 29 / 他

(資料:石川県国際交流課)

4

2 出身地域別留学生数



総数: 1,251人
() 内は実数(外国人留学生数: 9,925人)

地域	人数	割合
中国	1,066	85.2%
ベトナム	136	10.9%
インドネシア	58	4.6%
韓国	46	3.7%
タイ	43	3.4%
アジア	1,347	108.5%
ヨーロッパ	190	15.2%
アフリカ	50	4.0%
北米	166	13.3%
南米	122	9.8%
オセアニア	29	2.3%
他	29	2.3%

5

②留学生の教育

—大学を地域と結び世界に開く—



6

留学生受け入れに関する これまでの経緯



7

留学生の数的拡大

- 21世紀初頭までに
留学生10万人受け入れ

「21世紀への留学生政策に関する提言」(1983)
→2003年に達成

短期留学の推進

およそ1年間
必ずしも日本語を必要としない
出身国の大学に所属

8

留学目的の変化

- **学位取得型** 30代も多く比較的年齢が高い
大学卒業—就職を経て日本の大学院に留学
学位の取得が目的 多くは国立大・理系・大学院生
研究中心の生活 数年間滞在
- **日本体験型** 20代中心の比較的若い年齢層
出身国の大学(大学間交流協定校など)に所属した
まま日本留学 日本語・日本文化の体験が目的
多くは文系・学部生

9

留学生のタイプ

《学び方のタイプ》

- 学位取得型
- **日本文化体験型**



《金沢大学の場合》

- 日研生
- KUSEPなど



10

留学生教育の特徴

- 大学以外のカリキュラムの必要性
- 日本と日本人を知るための機会の提供
- 多様な学習の選択肢



地域の教育力



11

いしかわ金沢学の計画と実践

- 「いしかわ金沢学」とは地域に点在する有形・無形の文化的遺産・資源を集積し、その文化的価値を明らかにするとともに、それらを用いた体験活動を行う。さらには、留学生や日本人学生、地域住民の方々を対象に
- 「講義」と「体験」の両面に重点を置いた文化体験学習プログラムを開発し、提供する。

12

＜参考＞平成14年度—；創設年度 「金沢学」プログラム

- 全国大都市圏の大学からの参加もあり、参加者は日本を含む15の国・地域からの学生45名
- 2003年3月9日～15日までの6泊7日集中研修での「金沢学」講義
- 3コース（道コース・芸コース・町並み体験コース）に分かれての体験学習

13

加賀料理調理体験



14

和太鼓体験



15

金箔貼り体験



16



17



18

留学生を受け入れる意味は？

- ・日本人学生にとって
- ・大学にとって
- ・地域にとって




19



③地域の国際化

—大学を世界と結び地域に開く—



20

21世紀への留学生政策に関する提言

- ・留学生問題を今後の文教政策、対外政策の中心とすべき重要国策の一つとする
- ・2020年までに30万人の留学生の受け入れを旨とす

⇒グローバル化へ



21

留学生教育から見えてくるもの

- ・大学での教育指導体制
 - 次世代に必要な知識とスキル
- ・日本社会と対人関係の特質
 - 閉鎖性・内と外
 - 序列化意識
 - ジェンダー

日本と日本人の再発見



22

①例えば、文化の中で育つ人間

日本社会に特有な対人関係

アサーションが難しい理由
(何が行動の動機となるか)

23

日本型と欧米型の比較

役割社会	人格社会
制限コード	精密コード
依存	独立性
関係集約型(間人)	個体集約型(個人)
母子一体感	一体感からの独立
高い浸透性	
アナログ型	デジタル型

24

②例えば、多文化との接触
留学生の出身国の
言語や文化に触れる
⇒ 学習への動機づけ



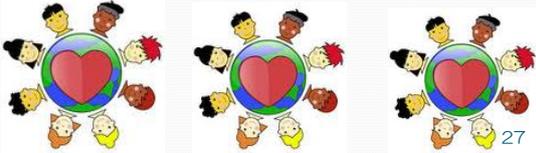
25

絵本読み聞かせプロジェクトの活動



26

④地球市民への歩み
—多文化共生社会の実現化—



27

多文化共生社会の実現化に向けて

直接に出会う機会と場の確保

- ・オール地域で
- ・コーディネートと協働体制
(多角的に総合的に)
- ・多文化と出会い、相互理解の深化を



28

お話させていただくチャンスを
ありがとうございました。

金沢大学国際機構留学生センター
大学院教育学研究科/人社環研究科

八重澤 美知子
(松下) 2014.2.15

29

学び、福祉、地域の支えあい—公民館を中心にして—

浅野 秀重

金沢大学地域連携推進センター 教授

私自身が大人の学びについて関心を持っているため、地域の大人の学びの拠点である公民館での活動を中心にお話しします。同じような活動をしている善隣館については触れませんが、基本的には目指すものは同じだという理解でいたいと思います。

1. 憲章と条例に見る金沢

初めに市民憲章を掲げました（図表 2）。市政 60 周年を記念して昭和 54 年につくられたもので、ご存じの方も多いと思います。前文では、金沢市を特徴づけるものが語られ、大きな五つの方向性が示されていますが、当然のことながらそのどれもが、世界の「交流拠点都市金沢」を目指す趣旨と合致しています。私自身は、その中でも特に、「めざそう いきいきと明るいくらしの創造を」という部分が学びや福祉とつながっていると思います。また、「つなごう みんなの力でまちづくりの手を」という部分は支え合いという雰囲気をつくる上で非常に重要な一つの方向づけになっていると思います。



次に挙げたのが、金沢を特徴づける公私協働という考え方です。公だけではなく、市民の皆さんの動きも非常に大切です。この考え方を盛り込んだ条例を二つご紹介します（図表 3）。私は、「子どもの幸せと健やかな成長を図るための社会の役割に関する条例（抄）」を子ども条例と捉えていますが、この第 2 条第 2 項に、金沢コミュニティの概念規定があります。金沢を愛する心が育んできた住民相互の高い連帯意識と、さまざまな分野にわたって相互に力を合わせて住みよいまちづくりを進めてきた、公私協働の土壌に培われた金沢独自の地域社会が

金沢コミュニティなのだという視点です。

もう一つの「みんなで支え合う健康と福祉のまちづくりの推進に関する条例（抄）」では、第 1 項で、長年にわたって互いに力を合わせて住みよいまちづくりを進めてきた公私協働の土壌について触れており、これは子ども条例と同じ趣旨だと思います。第 2 項でも、「健康と福祉のまちづくりは、市民及び事業者が、近隣の人々と心を通わせながら、互いに支え合い、協力し、及び連携することによって推進されなければならない」と書いてあります。健康と福祉だけではなく、防災のまちづくりも、み

んなが連携し合い、協力し、支え合って進めることが必要になってくるのではないかと思います。

2. まちと公民館

公民館は、基本的には、集う、学ぶ、結ぶ施設であると言えます（図表4）。ただ集まるだけではなく、そこで勉強会があるのです。勉強会というと、何となく上から強制されるようなイメージがありますが、勉強し合う、学び合うということです。公民館とは、学び合いを通じて地域の課題を見だし、そのためにみんなで取り組む必要があるということを確認しつなぎ合っていく、結び合っていく場所です。もちろん「えっへっへ、わっはっは」の世界だけでもいいのですが、しかしそこに「知」、学びが介在することによって、地域の「地」だけではなく、知識の「知」でつながっていくことが重要です。すなわち、「地縁社会」から「知縁社会」の場として公民館が機能する必要があるのではないかと。集う、学ぶ、結ぶことを通じて、人をつくることと併せて、地域をつくっていく役割を担っているのが公民館なのです。

図表5は、昭和29年（1954年）に出された「公民館図説」です。右下の絵で、男性がテコの要領で持ち上げようとしている石に「村興し」と書いてあります。その支点となっている石には「公民館」と書いてあります。当時から、公民館にはそのような場としての機能が期待されていたわけです。私たちが公民館のお父さんと呼んでいる寺中作雄さんは、公民館の生みの親であり、それをもう少し分かりやすく説明しました。（図表6）。寺中さんは、公民館とは社会教育の場、娯楽の場、自治振興の場であり、農村部・漁村部・山村部それぞれの地域産業を振興していくことについて考え学び合う場であると言っています。そして、次世代養成も大事な公民館の役割だと述べています。総じて公民館は町村振興の中心機関でなければいけないという捉え方にに基づき、公民館の活動や設置を奨励してきました。

今、公民館ではさまざまな活動が行われています（図表7）。地域連帯をつくったり、学校5日制等の対応をしたりして、学校と地域社会につながっています。金沢市は学校支援の体制を整えており、中でも中学校はかなり頑張っていて文部科学省の大臣表彰を受けているところもあります。そのように、地域と学校がつながることを支援する体制を地域につくることも公民館の大事な活動の一つなのです。

さらに、子育て支援も忘れてはいけません。入ってくる人も出ていく人もありますが、1人の女性が子どもを育てるだけではなくて、同じような悩みや課題を持った若いお母さんたちが集まって、みんなで悩みを考えていく場を提供することも必要だと思います。また、環境問題も大事なテーマの一つで、公民館の活動にはさまざまな期待が寄せられています。スポーツや健康、町会福祉の推進、防災のまちづくりといった大事な課題についても、それぞれの公民館は取り組んでいます（図表8）。

そうした公民館で行われている学習活動を、ユネスコのドロール氏は四つの視点で捉えました（図表9）。一つ目は、知るための学び（learning to know）です。われわれは知らないから勉強します。二つ目は、行動するための学び（learning to do）です。勉強したことを生かして何らかのアクションを起こすことです。三つ目は、ともに生活するための学び（learning to live together）です。1人が100歩歩くよりは、100人で1歩でもいいではないか、つまり、同じような問題意識を持ちながら、遅くともゆっくりと着実に一歩進むという学びです。四つ目は、人間であるための学び（learning to be）です。人である喜び、存在し続けることに喜びを感じることに学びは寄与しているという視点です。

私が平成22年に行った公民館の底力に関する調査の40問の中から、8問をご紹介します（図表10）。

グラフの一番上は、石川県民約 120 万人のうちの約 500 人を厳選して投げた質問で、141 人から回答がありました。その下は、比較のために出した、石川・福井県内の利用者の回答、一番下は金沢市の利用者の方の回答です。つまり、一番上と下三つはバイアスがかかっていると思って見てください。一番上は、普段公民館を利用している人もしていない人も含めた一般の人の回答で、無作為抽出です。利用している人が「よく利用されている」と答えるのは当たり前のことですが、「公民館は地域になくなくてはならない施設である」と回答した人の割合は、金沢市では 100%に近い数字です。次の「公民館の活動でいろいろな人と知り合えた」という質問も、ほぼ 100%に近い回答です（図表 11）。学びを通じて人と出会えるというのは、当たり前といえば当たり前のことで、そう思う理由については聞いていません。

金沢市をよいしょするわけではないのですが、石川・福井全体の数字と比べても金沢市の数字は大変大きいです。「地域住民の経験や持ち味を生かしているか」という質問に関しては、主事さんが悪いわけではないと思いますが、市内のさまざまな人材を十分活用しきれていないのかもしれない。しかしそれでも 95%という回答です（図表 12）。また、「公民館は、住民の絆、つながりづくりに役立つ」という質問についても、金沢市の数字は石川県全体と比べても圧倒的に高い数字です。「公民館活動は、元気な地域づくりに役立つか」「市や町が設置した公の施設なので安心できる」という問いに対しても、高い数字が出ています（図表 13）。図表 14 は、これらについて詳しく説明したものです。私は、公民館は地道な活動を通じて人と人をつなげているのではないだろうかと感じています。その力こそが公民館の底力であると捉えたいと思っています。

このような公民館活動の中で、福祉に特化した活動を展開しているのが、松本の蟻ヶ崎西公民館です（図表 15）。この公民館は、世帯数 800、人口約 2000 人の地域にあります。国や県、市が行っている公民活動を通じて勉強をした女性たちが、自分たちの地域を振り返ったときに、このままでいいのだろうかという疑問を感じ、生活課題を共に解決し、自分たちが住みたいまちに変えていくことが福祉なのではないか、そこで自分たちの学習の成果を発揮していこうではないかと考え、女性たちが自ら工夫して福祉のまちづくりを目指していったのです。そしてついに、平成 6 年に女性の町会長が誕生しました。町会ぐるみで住みよいまちをつくっていきましょうとしたのです。

自分の住みたいまちをつくるために、地域の課題に対してはそれが自助なのか、共助なのか、あるいは公助なのかという仕分けをし、質の良い「公助」「共助」「自助」の歯車を回そうとしました。自助でできる部分は自助で行えるように、蟻ヶ崎西公民館は図表 16 のような体制づくりをしました。その中で特徴的なのは、有償助け合いです。「あ・うんの会」は有償のボランティアです。1 時間 300 円で 2 時間以内、たんすの移動や病院への送迎など、無償ではなかなかお願いしにくいことも頼める体制をつくりました。「あいの会」は、1 食 300 円のお弁当を月曜日に 100 食、金曜日に 50 食、それを宅幼老所「愛・ぶんぶん」で食べ合おうという活動です。このような思いを集約したのが、「福祉の町づくり宣言」です（図表 17）。地域の家は部屋、道は廊下、広場は居間であり、地域一帯が一つの家族だというイメージを宣言したのです。公民館での学習活動を通じて、まちづくりを進めていこうという活動です。

言葉遊びのようですが、私は「こうみんかん」に次のような字を当てています（図表 21）。公民「館（やかた）」、公民「間」、公民「感」、公民「観」、公民「歓」、公民「環」、公民「幹」。ある主事さんにこの話をしたところ、彼は、公民館の主事は汗を流して労力を提供するから公民「汗」だともおっ

しゃいました。

この後のワークショップで議論していただけるならば、一つ一つのつながりをつくるための活動について、まちへの帰属意識の育て方、そして、協働という概念の中で市民が公の領域にどのような形で関われるかということについてご意見を頂きたいと思います（図表 24）。途中、省略したものもあり、特にこの前のスライドは私にとっては極めて重要なスライドでありましたので、どうぞ後で味わっていただければと思います。ありがとうございました。

学び、福祉、 地域の支えあい

— 公民館を中心にして —

金沢大学地域連携推進センター
浅野 秀重

1

1 はじめに

金沢市民憲章 昭和54年5月10日 議決

金沢を愛するわたしたちは、兼六園の四季のいどり、犀川・浅野川の清い流れ、山や街の豊かな緑、かおり高い伝統文化を誇りとし、希望と活力にみちたはたらく基盤と、創造性あふれる教育・文化の華さくまちづくりにつとめます。

- 1 ひらこう 世界と未来に心の窓を
- 1 めざそう いきいきと明るい ぐらしの創造を
- 1 まもろう 美しい心と ふるさとの自然を
- 1 つなごう みんなの力で まちづくりの手を
- 1 きずこう 個性ゆたかな あすの金沢を

2

条例に見る金沢の公私協働

○子どもの幸せと健やかな成長を図るための社会の役割に関する条例(抄)

この条例において「金沢コミュニティ」とは、金沢を愛する心が育んできた住民相互の高い連帯意識と福祉、環境、教育等のさまざまな分野にわたり相互に力を合わせて住みよいまちづくりを進めてきた公私協働の土壌が培われた本市固有の地域社会をいう。(第2条第2項)

○みんなで支え合う健康と福祉のまちづくりの推進に関する条例(抄)

健康と福祉のまちづくりは、市、市民及び事業者が、地域社会を構成する一員として、それぞれの責務に基づいて、長年にわたり互いに力を合わせて住みよいまちづくりを進めてきた公私協働の土壌を守り育てることを基本として行われなければならない。(第2条第1項)

健康と福祉のまちづくりは、市民及び事業者が、近隣の人々と心を通わせながら、互いに支え合い、協力し、及び連携することによって推進されなければならない。(第2条第2項)

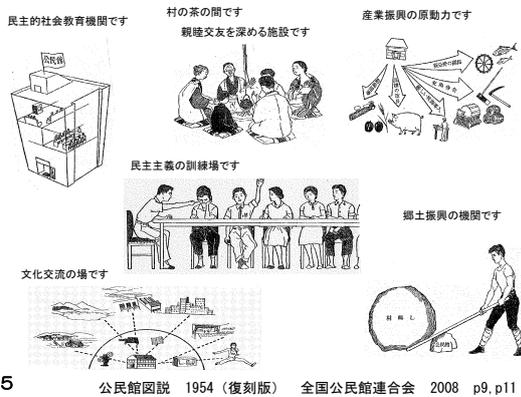
3

2 つどう、まなぶ、むすぶ拠点としての公民館

公民館における、つどう まなぶ むすぶ



4



公民館はどんな機能を持つか

- 第一に公民館は一つの**社会教育機関**である。
- 第二に公民館は一つの**社交娯楽機関**である。
- 第三に公民館は**町村自治振興の機関**である。
- 第四に公民館は**産業振興の機関**でもある。
- 第五に公民館は新しい時代に処すべき**青年の養成に最も関心を持つ機関**である。

その他その町村において必要と思えば尚色々な機能を持たしめて運営する事ができるが、要するにそれらの機能の総合された**町村振興の中心機関**である。

公民館の建設 寺中作雄 昭和21(1946)年

6

学習拠点としての町内公民館の機能

- 住民自治と地域連帯の創造(町会への参加、次世代の担い手づくり)
- 学校と地域との関係づくり(学校週五日制への対応、子どもの体験活動)
- 地域の子育て支援(母親の孤立防止、親子の遊び場)
- 若者の居場所づくり(地域における若者の役割、若者との交流)
- ごみの減量と環境づくり(ごみの分別、生ごみの堆肥化、ホタルの復活)
- 環境と開発の調和(地域の開発、施設の建設、自然環境の保全)

7

町内公民館活動の手引き(第5次改訂版) 松本市教育委員会 2005年

- スポーツと健康増進(気軽に運動できる仲間づくり)
- 「町会福祉」の推進(町内の安心ネットワークの構築)
- 地域文化の向上(お祭りの活性化、史跡の愛護・保存、郷土食・民話の伝承)
- 障害のある人もいきいき暮らせる地域づくり(障害者との交流)
- 地域の生産と働く場の確保(コミュニティ・ビジネスへの挑戦)
- 防災のまちづくり(災害弱者の実態把握、防災マップの作成)
- 人権意識の醸成(女性の町会参画、転入住民との融和)

8

町内公民館活動の手引き(第5次改訂版) 松本市教育委員会 2005年

学びの4つの側面

知るための学び
(learning to know)

**ともに生活する
ための学び**
(learning to live together)

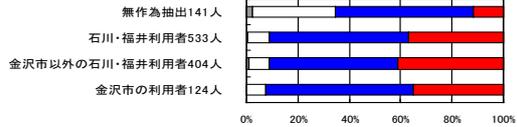
**行動するための
学び**
(learning to do)

**人間であるため
の学び**
(learning to be)

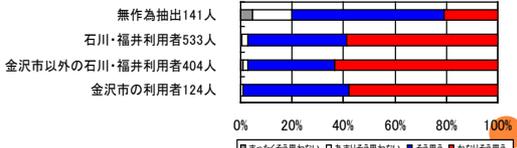
9

ユネスコ 21世紀に向けた教育に関する国際委員会
ドローール報告書「学習 - 秘められた宝」1997

1 公民館は地域の人によく利用されている

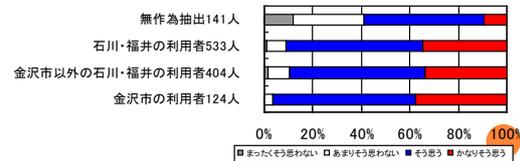
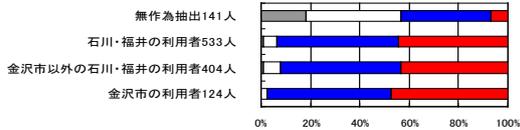


2 公民館は地域になくってはならない施設である



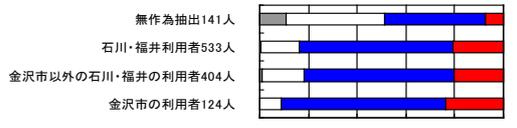
10 浅野「元気な地域づくりのための公民館の『底力』に関する調査」H22.11月実施

3 公民館の活動でいろいろな人と知り合えた

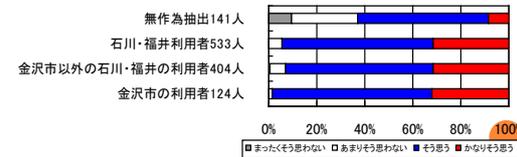


浅野「元気な地域づくりのための公民館の『底力』に関する調査」H22.11月実施

5 地域住民の経験や持ち味を活かしている

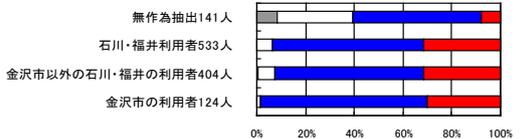


6 公民館は、住民の絆、つながりに役立つ

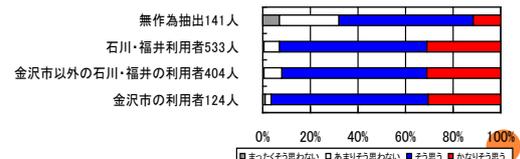


12 浅野「元気な地域づくりのための公民館の『底力』に関する調査」H22.11月実施

7 公民館活動は、元気な地域づくりに役立つ



8 市や町が設置した公の施設なので安心できる



3 浅野「元気な地域づくりのための公民館の『底力』に関する調査」H22.11月実施

公民館の「底力」と「地域住民のつながり」

災害に強い地域、支え合い励まし合う雰囲気になった地域づくり、建物や道路などの基盤整備だけではなく、コミュニティ意識の形成というソフト事業の基盤の整備は、焦眉の課題である。公民館は、基本的には、息の長い学習機会の提供、社会教育事業に象徴されるソフト事業の展開を通じて、地道に人を育て、人をつなげ、地域を元気づける力、それを公民館が本来的に持っている「底力」としてとらえたい。

地域における人と人とのつながり、これは、人と人とのより良い人間関係の構築と言い換えても良いものと思われるが、人間関係を育むためには、地域住民が日常的につながり合っていることが大切であり、このつながりは短時間につくりあげられるものではなく、日常的なあいさつの交わし合い、世間話、地域のイベントへの参加、可能な限り地域の世話を引き受けること、町内会等地域組織の総会等への参加などなどによる「顔の見える関係」がつけられていることによって、つながりができるのではないかと。地域住民のこうした「つながり」が、地域にいくつもの「自助」や「共助」を創り出してきており、地域への愛着を抱き、住んで良かった、住み続けたいと思う帰属意識を育てることになる。

14

松本市 蟻ヶ崎西公民館における 地縁大家族社会づくり

○ 町会活動の理念

原点：自分の住みたい町にしよう⇒地域づくりを通じて質の良い「公助」「共助」「自助」の歯車をまわす
一軒一軒の家が部屋で道路は廊下⇒集会所は居間⇒「地縁大家族社会づくり」

福祉とは：特別なものでなく日々の暮らしの質を高めるもの

○ 町会の活動

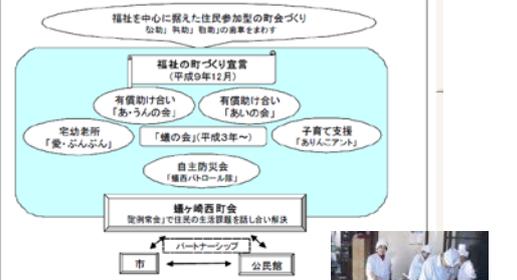
- 毎月28日に隣組長以上の役員が集まる「定例常会」を開き、住民の生活課題を「公助・共助・自助」に分けて話し合い、解決。
- 会議には20代から80代まで男性・女性を問わず70人から80人くらいが毎回集まり、意見交換。
- また、町会住民への情報公開を徹底するため、毎月町会の情報を記載した町会の広報紙を発行し、全戸へ配布。

【最近の市役所に対する要望の内容】

- 道幅の拡幅、信号機の設置、側溝の整備、除雪 など

15

地域力の発揮の分析



有償助け合い「あいの会」手作り弁当

16

松本市蟻ヶ崎西区町会 福祉の町づくり宣言

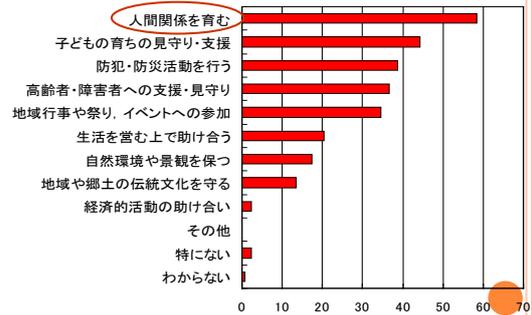
蟻ヶ崎西区町会は私たちの家庭です
道路は家の廊下で、各家はそれぞれの部屋です
「ふれあい広場」は、みんなの居間です
ひとりひとりが主役で、お互いに自己を高め合います
思いやりと優しい心を育て、支え合いの輪を広げます
人権と平等を大切にしながら、
誰もが安心して暮らせる住み良い町、
誇れる町づくりを旨とします

17

1997(平成9)年12月 蟻ヶ崎西区町会

8

内閣府「少子化対策と家族・地域の絆に関する意識調査 平成19年2月実施



第2期教育振興基本計画 第1部 総論 概要 一見が国の危機感に迫られた4つの基本的方向性

教育行政の4つの基本的方向性

- 1. 社会を生き抜く力の養成**
- 2. 未来への飛躍を実現する人材の養成**
- 3. 学びのセーフティネットの構築**
- 4. 絆づくりと活力あるコミュニティの形成**

創造 自立 協働

http://www.mext.go.jp/a_menu/keikaku/detail/_icsFiles/afilefile/2013/06/20/1336379_01_1.pdf

19

魅力的な公民館像

- 社会から、地域から、学習者から、存在することが好意を持ってみられ、その活動等が歓迎されるものであること
- 魅力的な活動とともに、その活動が地域に貢献し、創造的な文化を創出していること
- 学習機会の提供というサービスを通じて自己主導的に学習する地域住民を育てていること
- 地域住民間に顔の見える関係を構築すること
- 自らの役割の自覚と支え合う雰囲気づくりを進めること
- 日常的な公民館活動等を通じてのコミュニティづくりに寄与すること
- 学習活動を通じた地域課題の解決や克服の方向の共有化を図ること

**社会における学びから、社会を創る学びへ
地域コミュニティの創造的再生へ**

20

改めて、「こうみんかん」とは、

- 地域住民に対し学びの機会を提供する**公民の「館（やかた）」**
- 行政や地域の各種団体・機関と地域住民との「間（あいだ）」に位置し、必要に応じて地域住民と行政とを結ぶ**公民「間」**
- 地域住民にひとや体験・自然等との出会いの場を提供しその「感性」を豊かにする**公民「感」**
- 社会のしくみや地域課題などの学びを通じて人生観や職業観などものの見方や考え方に影響を与える可能性を持つ**公民「観」**
- 地域住民に地域で生き、暮らし、働き、支え合いそして学び合う**公民「軟」**
- 地域住民を強い絆で結び強固な環を形成することに寄与する**公民「環」**
- 魅力的で活力ある地域づくりの中核的な「幹（みき）」となる場、あるいは地域づくりの担い手、リーダー（幹）を育てる**公民「幹」**

21

地域を見る目、力、こころ

すべての市民に地域のことが見え、
市民のレベルで知的な地域活動を生起させること
そのためには、
**コミュニティがみんなのものとしての目を持つこと、
その目で見ること、
見る力のある脳をつくること、
脳には理論や知識とこころをもたせ、
そして手を持って判断したことの実行に参加すること**

堀尾正毅『脱温暖化』と『脱近代化』—まちやむらのこころと技術を作り直す—松永純夫編『環境 設計の思想』東信堂 2009年

22

学びは、
昨日と違った今日の自分、
今日と違った明日の
自分づくりのための行い

- 人との出会い、自然との出会い、
体験との出会い、学びとの出会いで、
- 本当のこと(真理)を追い求める力を
 - 人とつながり合う力を
 - 平和を守る力を
 - 意欲的に生きる力を

23

「公・共・私」型社会意識の

形成のための活動はいかにあるべきか？

- ① 家族のきずなやつながり、地域・コミュニティにおける人と人とのつながりを高めるための活動のあり方は？
- ② 地域の住民がそれぞれの「まち」への帰属意識を高め、地域活動への積極的な参加を促す活動のあり方は？
- ③ 市民が「公」の領域に積極的に参画し、市民と行政との協働を進めていくための活動のあり方は？

24

学生のまち・金沢の推進

東 利裕

金沢学生のまち市民交流館長

1. 学都金沢の歴史

金沢市が行っている学生のまち金沢の推進の話の前に、学都金沢としての歴史についてお話しします(図表2)。金沢は、文治政策を取り学術・工芸・芸能を奨励した前田家のとの関係が深い土地です。しかし、前田家は文治政策をしたかったわけではなく、120万石を超える大きな外様大名であった前田家を常に警戒していた徳川家の目から逃れる手段であったのだらうと思われます。3代藩主利常のときに徳川家から珠姫を迎えたにもかかわらず、徳川秀忠の病中に謀反の疑いをかけられて、寛永の危機と呼ばれる時代がありました。その後5代藩主綱紀が学問や文芸を奨励し、加賀宝生を取り入れました。そして、11代藩主治脩が藩学明倫堂をつくりました。

このような歴史の後に、金沢医学館や石川師範学校、石川県専門学校、第四高等学校、金沢大学という流れができました。

つまり、学都の歴史は金沢大学の歴史といっても間違いではないと思います。その中でも私は特に、四高(第四高等学校)の存在がとても大きいと思っています。四高はナンバースクールで、一高から八高までであった旧制高校の一つです。一高は東京、二高は仙台、三高は京都、四高が金沢、五高が熊本、六高が岡山、七高が鹿児島、八高が名古屋でした。これは旧帝国大学に入る学生のための予備校のような位置付けで、全国の俊英たちが集まって勉強していました。そのような学生たちが、金沢の街中を闊歩して議論をしていたのです。四高の卒業生の中には、鈴木大拙や、徳田秋声、西田幾多郎といった有名な方をはじめ、読売新聞社主で巨人軍の初代オーナーでもある正力松太郎がいます。この他にも四高が輩出した偉人はたくさんいます。このような歴史はとても重要です。

その後、昭和から平成に大学の移転がありました(図表3)。かつては、金沢城公園内に金沢大学があり、その隣に四高がありました。本多の森近辺には金短(金沢女子短期大学)やミッション系の北陸学院短大、金沢美術工芸大学がありました。これらが移転していき、1989年(平成元年)にとうとう金沢大学が角間に移転して、街中から大学がなくなってしまいました。

図表4は、外環状道路の整備計画図です。現在は、外環状道路に沿うように大学があることから、環状学都都市ともいわれています。聞こえはいいのですが、かなり問題点を抱えています。図表3で示している範囲は、図表4では赤い点線で囲まれた小さな範囲になります。かつてはこの小さな赤い点線の範囲の中にあれほど多くの大学が集積されていたのですが、これほど広範囲に散らばってしま



ったことがお分かりいただけるでしょう。学校から街中までのバス代は、星稜大学が一番安くて 230 円、金沢大学が 360 円、金沢工業大学や金沢学院大学は 400 円を超えていて、街中に行くのも結構大変なのです。

今、金沢市には、金沢大学、金沢美術工芸大学、金沢学院大学、金沢星稜大学、北陸学院大学、北陸大学があります。金沢学院大学、金沢星稜大学、北陸学院大学はそれぞれ短期大学部も持っています（図表 5）。また、隣接自治体には石川県立大学、石川県立看護大学、石川高専、金沢医科大学、金沢工業大学、金沢高専、金城大学、北陸先端科学技術大学院大学があります。合わせて 18 校です。専門学校は 28 校で、合わせると学生数は 3 万 5000 人超になります。教員数は 2000～3000 人なので、3 万 8000～9000 人の大学関係者がいることになります。金沢市の人口は、今年 1 月 1 日現在で約 46 万 4000 人、世帯数は約 19 万 3000 世帯です。つまり、46 万人に対して、4 万人弱の学生と教員がいることになります。この力を使わない手はないのではないかと思います。

大学が郊外移転したことで、多くの課題が出てきました（図表 6）。まず、街中に学生がいなくなり、街中の活気やにぎわいが失われてしまいました。また、街中にいたときは昔ながらの下宿などに住んでいた学生たちも、郊外移転した大学の周辺に新しく建てられたアパートやマンションに住むようになり、学生たちが単世帯化してしまい、結果、地域住民との交流が希薄化しました。それにより、住民からは学生が夜間に騒いでうるさいとかゴミ出しのルールを守らないというような苦情が出たり、学生の側も地域のおじさんたちを怖い存在だと感じたりして、学都としての魅力が薄れてしまったような気がします。街のにぎわいがなくなったことは、私自身も、金沢大学が移転したときに感じました。一時、片町や堅町に若い人がいなくなり、大丈夫なのだろうかと思った記憶があります。

2. 学生のまち推進条例の制定

その対策として学生のまち推進条例を制定しました。これは、市民と学生の交流を図り、学生がより良い社会人になっていくことを目指す、全国で初めての条例でした。この条例に至るまでには、香林坊ハーバーという映画街があったときの建物を使った取り組みや、今も続いている学生の雪かきボランティアなどの活動を行いました。そのような活動の流れの中で、条例をつくって学生の力を生かすことを市の方針として進めていこうとしたのです。

学生のまち推進会議という大人が行う会議や、地域推進団体という地域と学生と金沢市が協定する団体もあるのですが、条例 15 条では、学生が主体の団体をつくることを定めており、金沢まちづくり学生会議というものをつくりました（図表 7）。59 人のうち半数以上が県外出身者で、金沢大学からは 15 人が参加しており、現在 5 期目に入るところです。偶然なのですが、第 1 期代表は金沢大学の学生、第 2 期は金沢工業大学の学生、第 3 期は星稜大学の学生、第 4 期は金沢学院大の学生が務めました。そして、これから迎える 5 期目では、ついに女性の代表が誕生しました。そろそろ女性に代表になってほしいと思っていたので、ちょうどそのように決まり、嬉しく思っています。

図表 8 は、条例により定められた、まちなか学生交流街です。この写真は木倉町のもですが、木倉町の商店街のほか、新天地商店街、中央味食街を大人と交流できるエリアとして学生が決めました。この三つの商店街の良いところは、飲み屋が多いにもかかわらずキャバクラなどの風俗営業店がない点です。もともと金沢には性風俗店はありませんし、安い居酒屋もあり、学生たちが集うにはちょうどいい交流街です。そして、後からになります、そのちょうどエリアの真ん中に金沢学生のまち市

民交流館ができました。

図表 9 は、第 1 期の学生に作成してもらった学生交流街 MAP です。学生自らが取材を行い、店の紹介を掲載して、学生たちに配布しています。だいぶ店が入れ替わったので、来年度の予算で新しいものにつくり替えたいと思っています。この学生交流街を使って、学生まちなか夜塾も行いました。この三つの商店街から各 3 店、計 9 店を選んでもらい、そこに経済界や行政などいろいろな分野の有名な人、金沢を代表する人を講師として招き、学生 5~6 人とお酒を飲みながら語らうというものです。この写真は中央味食街で開催したもので、真ん中にいるのが金沢 21 世紀美術館の秋元雄史館長です。金沢市の市長や副市長にも講師として参加してもらいましたし、芸子さんや北國銀行の専務さんにも入ってもらったことがあります。

参加費として学生から 1000 円ずつ集金し、金沢市が 4000 円を出して開催していましたが、3 年間実施したところで、いくらなんでも税金を使って学生に酒を飲ますのはいかなものかという意見もあり、今年度は、参加費は 1000 円のままで塾だけを金沢学生のまち市民交流館で行い、その後に自分たちのお金で飲みについてもらう形に変えました。参加した学生には感想文提出が義務づけられています。なかなか出さない人もいましたが、感想文未提出の学生には残り 4000 円の支払いも課すと伝えるとみんなすぐ書いてきましたので、今まで感想文が未提出だったことはありません。

図表 10 は、交流街を使って開催したまちなか学生まつりの様子です。木倉町の真ん中にある木倉町広場を使い、学生が企画・運営します。地元の商店街と交渉し、協力を頂き、屋台を出してもらったりしての開催です。もちろん逆に、新天地商店街や木倉町のお祭りなどのときには、学生たちも手伝いにきてくれます。

そして、平成 24 年 9 月 29 日に金沢学生のまち市民交流館がオープンし、ちょうど 1 年少したちまです。大正 5 年建築の町屋を改修、一部新築して使っています。山出前市長の指示で、犀川のほとりにあった「かわしん」という料亭が平成 11 年に営業をやめたときに、大広間に使っていた資材をもらい受け、企業局の倉庫に保管しておき、この交流館建設に当たりその資材を使い、職人大学の職人に復元していただいたのです。ぜひ皆さんにもお使いいただきたいです。山野現市長は、学生たちについても「お前たちはお金がなくてもいいからとにかく街中に来てくれ、そうすれば大人が面白がって集まり、お金を落としてくれる」と言っています。

図表 12 は、Canazawa Campus Summit の様子です。Campus Summit とは、その日に出会った学生をグループにして、24 時間で企画をつくってプレゼンテーションするものです。昨日、この企画があり、金沢のまちを知った上で後輩に金沢の良さを伝えていくというイベントを開きました。

図表 13 は、オープンシティ in 金沢の様子です。これはオープンキャンパスにならって、金沢市の良さを知ってもらうために学生たちが企画した金沢のまちを知るための企画です。

最後に、課題と期待をまとめてみます（図表 14）。まず、街のにぎわいへの寄与をどのような指標で測るかという課題があります。また、このような活動に取り組んでいる数多くの学生たちをどう評価してあげたらよいかという課題もあります。期待としては、子どもたちが憧れるような、自分たちもあんな学生になりたいと思うような学生を育てたいのです。そして、学生自身が、自分と子どもたちの将来をつくっていく良い市民になってほしいと願っています。

私は昨年だけでも 20 以上の視察を受けましたが、4 年たてばいなくなってしまう学生に対して、なぜ金沢市はここまでやるのかという質問をよくされます。私は、金沢で成長していった学生が、新し

い就職先や故郷でより良い市民の1人となり、そのまちを良くしてくれたらそれでいいのではないかと思います。全国でも、条例までは制定されていなくても同様の取り組みをしているところは他にもあり、そのようなところがたくさんあれば、日本の未来は明るいのではないのでしょうか。これを支えてくださっているのが金沢市民です。

市役所は皆さんが思っている以上に苦情の電話が多い場所なのですが、学生の施策に対する苦情はほとんど受けたことがありません。市民の皆さんは学生に対して大変寛容だというのが、職員の一一致した感想です。その寛容さは、四高時代からずっと受け継がれている、金沢が将来の学生を育てているのだという気概や誇りから来ていると思います。昨年11月に北國新聞で金沢大学の城内キャンパスの紹介があった際に、城内の最後の学長であり、角間の最初の学長である岡田晃先生が、「キャンパスが城内にあったときには、城下町の市民の皆さんの温かさがあり、それは四高時代から受け継がれたものではなかろうか」とおっしゃっていました。金大の学長さんも同じように感じておられることを知り私も安心しました。これからも頑張っていきますので、どうぞ金沢の学生のまちづくりにご協力をお願いいたします。

ワークショップの進め方

司会 これから後半のワークショップに移ります。各テマ一つ一つのテーブルで、意見交換を進めていただければと思います。最初にお配りした黄色い紙の裏側に、テマごとのワークショップの進め方について案が記してありますので、参考になさってください。40～50分の意見交換の後、グループごとに発表していただき、それを基に最後に全体で再度パネルディスカッションのような形で意見交換をするという流れになります。せっかくですので、テーブルごとに自己紹介から始めていただいても結構です。

このワークショップの課題は、今回のタウンミーティングの課題でもある地域と大学の連携による世界の「交流拠点都市金沢」の実現を目指し、そのための金沢大学と金沢市との連携による地域連携プロジェクト、地域協働プロジェクトをテマごとに提案することです。出ている課題や意見を踏まえて、テマに沿った具体的なアイデアを提案ください。プロジェクトの名称を考えてみるということでも結構です。発表はグループごとをお願いします。発表後はパネルに貼りますので、模造紙は縦に使ってください。ワークショップの進行役は、基本的には話題提供した方々を想定していますが、グループによって自由に意見交換しやすいような雰囲気を進めていただければと思います。その後、各グループ3分程度の時間で発表していただく予定です。よろしく願いいたします。

1

学生のまち・金沢の推進




2015年春・北陸新幹線開業

金沢学生のまち市民交流館
東 利裕

2

学都金沢の歴史

藩主前田家の文治政策により学術、工芸、芸能を奨励・普及

- 藩学明倫堂(寛政4年～明治3年)
- 金沢医学館(明治3年～明治8年)
- 石川師範学校(明治7年～明治26年)
- 石川県専門学校(明治14年～明治21年)
- 第四高等学校(明治20年～昭和25年)
- 金沢大学(昭和24年～)

第四高等学校が輩出した人物

- 鈴木大拙(仏教学者、文化勲章受章)
- 徳田秋声(小説家)
- 西田幾多郎(哲学者、文化勲章受章)
- 正力松太郎(衆議院議員、読売新聞社主)



第四高等学校

3

昭和～平成の大学移転



金沢大学(1989年移転)

北陸学院短大(1967年移転)

金沢女子短大(1981年移転)

金城保育学院(1976年移転)

金沢美術工芸大学(1972年移転)

4

現在の大学の配置



環状大学都市

金城大学

石川県立大学

金沢工業大学

北陸学院大学

金沢美術工芸大学

金沢星稜大学

金沢大学

北陸大学

5

金沢の高等教育機関の状況



①金沢大学

②金沢美術工芸大学

③④金沢学院大学

⑤⑥金沢星稜大学

⑦⑧北陸学院大学

⑨北陸大学

高等教育機関	18校	31,983人
専門学校	28校	3,849人
合計	46校	35,382人



6

大学の郊外移転による課題(時代の変化)

- 大学の郊外移転 → まちなかに学生が集まりにくい
- 学生の住まいの変化 → 住民との交流が希薄化
- 学都としての魅力復興、まちの賑わいの創出の必要性

↓

学生のまち推進条例の制定
(平成22年4月1日施行)



7

条例に基づく「学生のまち金沢」推進施策

①金沢まちづくり学生会議

- 平成25年度は第4期生(現在59名)
- 学校間の枠を越えて活動(9大学から参加)




8

条例に基づく「学生のまち金沢」推進施策

②まちなか学生交流街の創生

繁華街に学生が集い、大人との交流ができるエリアづくり





9

条例に基づく「学生のまち金沢」推進施策

③まちなか学生交流街MAPの作成



まちなか学生交流街の魅力を学生が取材・編集しマップ化(1期生)

④学生まちなか夜塾



- まちなか学生交流街のお店が会場
- 学生が、金沢の各界のリーダーと伝統文化や経済、まちづくり等を語り合う
- 未来を担う人材の育成と金沢についての理解を深める



10

条例に基づく「学生のまち金沢」推進施策

⑤まちなか学生まつり



- 平成25年10月13日開催(4回目)
- 場所:木倉町広場、金沢学生のまち市民交流館
- 学生会議が企画し、地元商店街と連携して運営





11

条例に基づく「学生のまち金沢」推進施策

⑥金沢学生のまち市民交流館



- 大正5年建築の町家を改修、一部新築して平成24年9月29日開館
- まちなかでの市民と学生の交流の場
- まちづくり活動における情報交換と学習の場




開館からの1年間で26,038人が来館(目標25,000人)



12

条例に基づく「学生のまち金沢」推進施策

⑦Canazawa Campus Summit

- 初めて出会った学生たちが、まちなかの賑わい創出企画を24時間で作りあげ、実現をかけてプレゼンを行う企画コンペ
- 多くの学生にまちなかに興味・関心を持ってもらい、まちづくり活動に取り組む意識を醸成する





13

条例に基づく「学生のまち金沢」推進施策

⑧オープンシティin金沢

- 大学のオープンキャンパスが企画のイメージ
- 新入生に金沢の魅力と学生の活動を知ってもらう
- スタディツアーや交流イベント等を実施






14

課題と期待

課題

- 取り組みによる成果の指標化
- 交流館の拠点化の推進



期待

- 子どもたちが憧れる学生
- 自分と子どもたちの未来を拓く、より良き市民への成長



15

市民が支える学生のまち金沢

未来を担う若者を育む学都としての気骨と誇り

市民に受け継がれる学生への寛容性




16

ご清聴いただき
ありがとうございました



金沢学生のまち市民交流館



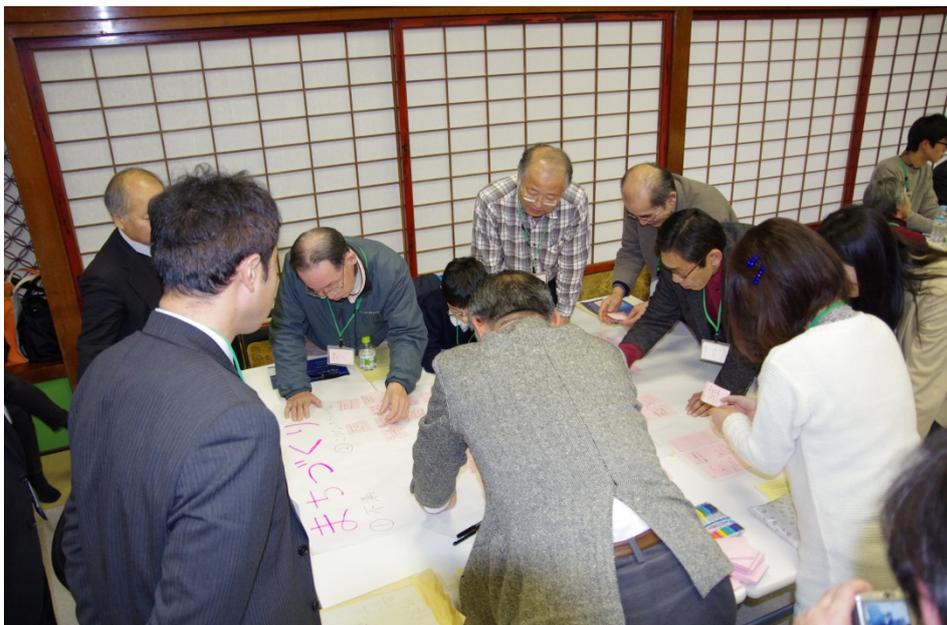
まちづくり(中心市街地活性化、都市交通)

発表者 1 まちづくりについて、バス代が高い、バスの乗り継ぎが悪い、夜間のバス便が少ないという課題が挙がりました。それに対して、学割などの割引制度を充実させること、紙ベースやウェブサイトなどによる乗り継ぎの情報提供を充実させる案が出ました。また、環状道路ができたせいか旭町方面のバスがとても少なくなったと聞くので、利用者とのニーズが合っていないという問題もあると思います。

次に自転車の利用者のモラルが低く、放置自転車が多いという課題が出ました。駐輪場と専用道路の整備がなされておらず、車との接触がありそうで怖いということです。駐車場が少ない、駐車場の料金が安いという課題も出ました。この対策を考えるのは難しく、解決案は出ていません。中心街の活性化が進んでおらず、空き家や空きテナントが増えている点については、まず、空いている古民家を公民館のようなコミュニティの場にする事で人が集う企画を立てていくという案が出ました。

その次は、家族で楽しめるお店や場所が減ったという点が挙がりました。ファッション系の店が少なく、仮にあったとしても知る機会が少ないと思います。観光客を呼び込む場所や仕掛けが必要ではないでしょうか。これは集客できるものがないということです。これに関しては、例えば酒マルシェのようなものや、先ほどお話にもあった3000円で3店舗楽しめる企画などを増やしていくことで、それぞれのまちに特色を持たせイベントや祭りを導入するのはどうかと思います。

今後に関しては、1年を通して街中でできるミニイベントの活用が挙げられます。今日のメンバーの中に朝市をやっている方がいらっしゃいました。興味のある方はぜひお越しください。その際は車ではなく、自転車かバス、徒歩でお願いします。また、さまざまなことを金沢の歴史という糸でつなぐことも大切だと思います。この他、交通の割引助成、空き家の活用、食品加工の場所が欲しいなどの意見も出ました。



ワークショップ:グループ発表

国際交流

発表者 2 まず、国際交流に対する不満として挙げられるのは、自文化に対する理解不足です。金沢市民ですら金沢の文化を理解していません。交流の場も不足しています。国レベルでも、国際交流に関する施策が不足していますし、大学でももう少し取り組みが必要だと思います。また、言語の壁がまだ高いという問題もあります。

発表者 3 それに対して、教育、交流、個人レベルでの情報発信が大切であるという考えにたどり着きました。例えば、特に若い人には外国が怖いと感じている人が多いそうなので、そうではないと伝えていけたらいいと思います。私は今夏、ロシアのイルクーツクに行き、ホームステイも経験したことで、外国は怖くないことをあらためて感じる事ができました。

発表者 4 私は交流の場の不足についての具体的な改善策を述べたいと思います。インターンシップを活用して企業と学生が関わる場を持つこと、市民レベルでは留学生と市民が公民館や児童館を交流の場として使ってより密接な関わりを持つ工夫を凝らすこと、ホームステイについては地域と大学の連携の中で町屋などの市の施設を使って行うことなどの案が出ました。

発表者 5 その他の問題点の解決策として、発信という点に関しては、日本の文化を学ぶ機会の喪失ということにおいては市内の Wi-Fi を整備することがその一つの手立てとして挙げられます。また、現在進んでいる、いしかわ金沢学というものをさらに進めて交流の手段にすることや、若者を海外に送り出したり、受け入れたりする手助けもさらに進めていく必要があると感じました。



ワークショップ:グループ発表

学び、福祉、地域の支えあい

発表者 6 私たちのグループでは、「学び、福祉、地域の支えあい」ということを考えるために、地域の方針や人との関係をつくる上で重要になってくる公民館について話し合いました。公民館は防災や教育という点でも非常に重要な役割を持ちますが、それらの中でさまざまな問題が挙がりました。それをまとめると、町会など地元との関係、行政との関係、学生との関係という三つのグループに分けられました。その中の問題点をまとめると、まず、学生からは公民館の情報が全く分からないという点が出ました。また、高齢化に伴い担い手が不足していること、活動がマンネリ化していること挙げられました。これは役職員が固定されているために起こる問題だと思います。

これらの問題を解決していくためには、従来の活動のみならず、若者を取り入れられるような公民館を目指すべきだという結論に達しました。そこで考えたのが、学生参加の「〇〇公民館ごちそうさんプロジェクト」です。簡単に言えば、1品持ち寄りで一緒にご飯を食べるという企画です。村の人は奥さんの手料理を、学生は20歳以上ならお酒を持ち寄って、食事を通じて地域の人との交流を深めてもらおうという企画です。このような活動を通して、昔から言われている「同じ釜の飯を食う」間柄を構築し、若い人と地域の人との境を取り除くことが可能になっていくのではないのでしょうか。また、活動のマンネリ化については、学生の意見も取り入れていくことで新しいことにチャレンジしていけるのではないかと思います。



学生のまちづくり

発表者 7 学生が地域に参画することにより、地域がより良くなるということ、学生も4年間という期間限定ではありますが、金沢の住民であるという前提でお話します。

「大学=学生」と考えると、市民と大学が協働していろいろなことができればいいのですが、学生がやっていることが市民の方々にはよく分からない、風通しが悪いという問題が出ました。そこで、対策案として次の三つが挙げられました。まず、学生のまち市民交流館のような交流の場をつくることです。その上で、学生団体への支援が必要です。今も学生団体がいろいろな活動をしていますが、継続が難しいようなので、コネや金銭的な支援など、学生にはない部分を地域の大人にバックアップしていただけるような仕組みがあればよいのではないかと思います。また、テレビ、ラジオなどメディア媒体を学生が使えるようになれば、自然と市民の方に学生の活動を理解してもらえるようになり、支援につながるのではないかと思います。

また、学生のまち市民交流館にいるようなコーディネーターも必要です。期間限定で金沢に来ている学生に一番不足しているのは資金とコネですが、何かやりたいというやる気だけはあるので、街ぐるみで大人にバックアップしてもらえれば、真の学生のまちづくりになるのではないかと思います。そしてやがて、金沢市が学生のやる事が実現できるような環境になっていけば、それは金沢市にとっても良いことであると思われます。

金沢市でそのような活動をした学生は、将来、金沢以外のフィールドに出たとしても、必ず地域に対してコミットしていく人間になり得ると思います。金沢市には、市ぐるみの学びの場であってほしいと、学生の立場から思います。



全体での意見交換ととりまとめ

進行：横山 壽一

金沢大学地域連携推進センター長 教授

発言者 1 交通の問題についてです。学生割引だけでなく、市民も乗り継ぎの際に割引されるようなアイデアがあればと思います。現在は ICa 導入で電子化されており、どこで乗ってどこで降りたかチェックできるので、それを利用して割引できるはずですが。北陸鉄道バスはまだされていないようなので、進めてもいいのではないかと思います。

高山 ICa を使うと、30 分以内のバス乗り継ぎで 30 円の割引が適用されます。私は ICa 導入に関わったときに、もう少し割引できないかと言いましたが、これが限界のようです。実際に、東京や大阪など他の地域ではそのようなことは全く行っていません。共通カードで利用できる仕組みにはなっていますが、恐らく料金は個別に取られます。唯一、京都は市バスと地下鉄が同じ経営なので、金沢市よりももう少し高い割引率で割引されています。

また、ICa には入金時に 1 割のプレミアムが付くので、Suica に比べればありがたいことです。東京や大阪に比べて距離に対する料金が少し高いので、割高感がぬぐえないかと思いますが、その辺は難しいです。

発言者 1 乗り継ぎは 30 分以内とのことですが、30 分でバスは来ますか。

高山 乗り継ぎの便利な場所は、30 分以内で来るように設定してあるはずです。

発言者 1 では、不便な場所では乗り継ぎ割引は使えない状況ということですか。

高山 武蔵ヶ辻や香林坊、金沢駅などの主要な場所は問題なく乗り継ぎができるようにしてあります。香林坊には複数のバス停があるので、バス停からバス停の間をゆっくり歩いても大丈夫なように 30 分という設定をしています。

発言者 1 海外などでは、2 時間以内ならば半額になるというところもあるようですが、そこまではいかないのでしょうか。

高山 民間企業なので、そこまではいかないようです。

発言者 2 金沢大学タウンミーティングということですから、学生というのは金沢大学生限定でしょ

うか。金沢大学だけがもりの里にあり、他の学校は金沢駅に近い便利なところにあるので発想が違ってくと思います。また、交通の問題でいえば、ふらっとバスは金沢市が援助しているバスなので、民間との区別が必要だと思います。

横山 今日は金沢大学タウンミーティングなので、金沢大学が金沢市の地域とどのように連携しているかということが課題ですが、金沢市が取り組んでいる学生参加のまちづくりは、金沢大学の学生だけを相手にしているわけではないので、広く考えていただいていたいいと思います。その中で、金沢大学がどのように関わっていき独自の役割を果たせるかを整理できればと思います。

発言者 2 それは現役生ですか。Uターンする卒業生などについても考えるべきですか。

横山 ここでは金沢に住んでいる現役生がどう関わっていくのかということについてお願いします。

発言者 2 現役生ですね。現役生の活性化がどうやって地元フィードバックされるのかということとは少し違いますね。

横山 そうですね。他はどうでしょうか。

発言者 3 私は金沢市の中心街で朝市を運営しています。その朝市には、地元町会のコミュニティの場が併設されていますが、人不足が一番大きな問題です。カニ鍋などいろいろなイベントをやりたいのですが、人が足りません。金沢大学の方と一緒にということは可能なのでしょうか。もし可能ならば、ぜひお願いしたいと思います。

高山 いろいろなアイデアがあると思います。例えば、サークルをつくるというアイデアです。地域貢献にも役立つので、大学側もサークルを認めないことはないと思います。ある程度の人数が集まり正式にサークルとして申請すれば、大学もきちんと支援できると思います。

そこまでいなくても、学生とコミュニティや朝市を開くグループとのつながりを築いていく必要はあると思います。もっと言えば、その面白さを学生に知ってもらうような努力や工夫が必要だと思います。朝市が学生にとって魅力的ならば、放っていても学生は集まります。しかし、あまり魅力がなければ、いくら声を掛けても集まりません。その辺りを考えていただくことが重要だと私は思います。

横山 他にないでしょうか。少し積極的なプロジェクトの提案などはどうでしょうか。

発言者 4 今、金沢駅の地下広場で行っているようなイベントを、空き家になっている町屋などで行えないのでしょうか。そのときには交通費や駐車場料金が発生するので、少し割引を考えると利用者増加や街中活性化につながるのではないかと思います。

もう一つは、公民館という小さなコミュニティではなく、もっと大きなコミュニティ広場のよう

場所で、書道や写真など自分たちの持っている特技や趣味を発表できるといいのではないのでしょうか。

横山 ありがとうございます。一つの提案として受け取りたいと思います。他はどうでしょうか。

発言者 5 先ほどの朝市とコミュニティの場の話についてです。学生のまちづくりの班でも、コミュニティカフェのようなものがあつたらよいのではという話が出ました。学生がしたいと思うことと地域が望むことをマッチングさせて、活動と人を結び付けていける場があつたらいいという意見が出たので、ぜひ実現させていただきたいと思います。

また、私個人は農業や農村に興味があります。友人にも農業に興味を持って活動している学生がいます。12月に先輩の紹介で農業振興課の方と面識を持ち、「今年度、金沢市の中山間地の朝市支援として一般の方をお手伝いとして派遣していたけれど、課題が見つかったので学生を巻き込んで派遣したい。どうすればいいか」というお話を頂きました。

しかし、学生側としては、やはり先ほどから挙がっているように交通費や交通手段の問題が一番のネックです。朝市支援に関しても、くすぶっている学生は絶対にいるので、交通面や資金面でのサポートがあれば、もっといろいろな人が関わっていきやすいと思います。コミュニティカフェや朝市のことを前向きに検討していただけたらよいと思っています。

横山 参加できるような条件が整っていけば、つながっていくのではないかと思います。

発言者 3 この構想は、農業振興課から、耕作放棄地をどうにかできないかという問題を投げ掛けられたことから始まっています。耕作放棄地を利用して新たに農業を始める方の販路として朝市を始めました。実際に朝市をやってみたところ、住民の皆さんから食品スーパーの野菜は農薬などが怖いという声があつたため、それならば、朝市では低農薬・無農薬の野菜にこだわらしましょうということに発展したのです。そして、非常にたくさんの方が、特に高齢者の方が朝市にいらっしゃるようになりました。

小将町の朝市が非常にうまく進んでいる例です。フリーマーケットになっていて、魚屋のほか、衣料品店や陶器店などいろいろな方が出店できるようになっています。この会が終わりましたら早速相談させていただきたいと思いますので、よろしく願いいたします。

横山 すぐに話がつながっていくのがこのような場のいいところです。他はよろしいでしょうか。

発言者 2 以前、コミュニティカフェが横安江町にあつたのですが、2年ほどでなくなってしまいました。小将町の朝市も、チャレンジ事業に応募して通り、市がある程度の予算を出しているのだと思いますが、コミュニティカフェは、正確にデータを取ってはいませんが、市のお金がなくなったために継続できなくなった気配を強く感じています。ですから、あつたらいいなというよりも、金沢まちづくり市民研究機構でも発表しているように、既にある事業にどう永続的に資金支援を続けていくかという問題ではないかと思います。

発言者 6 地域連携推進センターで行われている、地域貢献型の学生団体の活動情報を発信するようなサイトがあると思うのですが、地域で何かやるから集まってほしいというものだけではなく、地域から朝市などの活動を学生向けに発信するようなことができればよいと思います。学生も情報がないと動けないので、学校側から発信してもらいたいです。

発言者 1 ボランティアの募集情報自体は、学生支援課などがまとめて、ポータルで流れています。大学にはボランティアの要望は来ていて、学生に案内もされますが、実際に学生からの応募があるのは、ほとんどが東日本大震災関係の支援ボランティアだというのが現状です。

横山 終了の時間が近づいてきましたので、最後に、話題提供して下さった方にご発言いただきたいと思います。今日のテーマは、世界の「交流拠点都市金沢」の実現でした。金沢市のパンフレット「世界の『交流拠点都市金沢』をめざして—概要版—」の中には、「特性を生かした交流拠点都市としての機能強化が必要」という文言が出てきます。つまり、金沢市が持っている地域のまちの特性を生かして機能を高めていくことが、「交流拠点都市金沢」をつくっていく上で重要なポイントだと定義されています。今日の前半では、金沢の特色として、学生や留学生がたくさん集まっていること、公民館が地域にたくさんあることなどを挙げていただき、その現状を話していただきました。そうした金沢が持っているある種の強みは、現在必ずしも強みになっていない部分があるので、それをどのように強めていくか、そのときに地域と大学がどのように連携していけるかということが、一つのポイントになると思います。

もちろん、今日出された課題は、必ずしも大学が関わることでできるものばかりではありません。しかし、せっかく出していただいた意見なので、全て何らかの形で生かしたいと思います。大学内でも整理し、それを金沢市にも見せて整理してもらいたいと思います。

今日のミーティングのまとめとして、金沢の特色を生かした機能強化という点で、具体的に大学として、連携事業として、これからどのように取り組んでいくことが必要か話していただきます。では、高山先生からお願いします。

高山 これは非常に難しい問題なので、今日の議論で結論は出ないと私自身は思っていますが、ヒントは幾つか出たのではないかと思います。今日は「まちづくり」「国際交流」「学び、福祉、地域の支えあい」「学生のまちづくり」という四つのテーマを考えましたが、これら全てが関わり合っていることはご理解いただけたのではないのでしょうか。

金沢の特性として、最初に挙げるとすれば学都です。学生がこんな小さな四十数万人の都市の中に1割弱もいるのは、ものすごいことです。ですから、学生同士がきちんと街中で集うような仕組みをつくるべきだと思います。最近では、同じ大学、同じクラス、上下のつながりさえも非常に薄くなりました。同じクラスに4年間いてもあまり話をしたことがないというとんでもない状況もあります。しかしそれ以上に、金沢大学と金沢工業大学、星稜大学、金沢学院大学なども含めて、いろいろな大学の学生が集ってネットワークをつくる仕組みが恐らくあまりないのです。大学間のつながりという意味では、例えば大学コンソーシアム石川がありますが、学生自らが交流するような仕組みはありません。それを一番大きな大学である金沢大学が中心になってつくるのが望ましいのではないかと思います。

す。そしてそれを行政が支援するという意味から考えると、今日のこの場は非常に貴重な場であり、この場をうまく活用していけないかと思っています。

八重澤 私は四つの柱の背後にあるものについてお話します。これは私の持論かもしれませんが、大学は人集めがとても上手な組織だと思います。しかし、予算がないために多様な講師が呼べない、多様な文化施設を持っていないという面があります。逆に、それらを持っているのは地域です。さまざまな場所に講師になり得る人材がたくさんいるので、両者が組めば非常に良いものができると思います。いしかわ金沢学は、ずっとその方式でやってきています。大学がなぜ人集めが上手かという、試験期間など学生の状況に関する情報をたくさん持っているからです。ですから、どうぞ大学に相談してください。

私は相談機能の中心となるのが地域連携推進センターだと思っています。もちろん、各質問に個別対応はしますが、地域連携推進センターで情報を集めてもらえば、適切な教員を紹介するなどの対応がすぐにとれると思います。私たちは、地域活性のために学生をもっと集めたいという要望に対して、どのようにすればいいか、どの時期なら多くの学生が参加できるかという情報を提供できます。参加したいと思っている子が参加できないのは非常にもったいないことです。もっと多く来てくれたらどんなに良いだろうというのは皆さんも共通に感じることでしょう。大学、地域、センターの役割をあらためて確認すれば、活動がより生き生きと回っていくと思います。

浅野 私自身の公民館活動は、直接、個々の公民館に出ていくというよりは、主として、公民館主事さんの研修会などで、公民館の果たしている役割や、地域の人たちをどのように高めているか、また、そこで学んだことをどのように地域に生かしていけるかということをお話しし、活動を実践する人たちの意識啓発、思いに対する情報提供をしているつもりです。ですから、集う、学ぶ、結ぶことを大原則にしながら、日々の公民館活動を行ってほしいと思います。

先ほどの議論の中でも、マンネリ化しているのではないか、やっていることが見えないのではないかという課題に対し、情報発信が下手だという点が指摘されました。情報という言葉は「情けの報せ」と書きます。この情報に触れて良かったと思ってもらえる報せを提供したいですし、情けの報せを知ることのできるような体制を整えておくことが必要だと感じています。

学ぶということは、日々変わっていく自分づくりだと思っています。今日学んだことが明日生きるかどうかなんて誰も意識していませんが、その積み重ねが今の私たちをつくっているのです。学んだことを通じて、われわれは、騙されない力、真理を見極める目や耳を持つこととともに、つながっていく力、平和を維持する力、めげずに何とか踏ん張る力を付けることにもつながっていると思います。

われわれが落ち着くところは、食べることです。「ごちそうさんプロジェクト」というと「なんだ、食べることじゃないか」と言われるかもしれませんが、平和だから食べることができるのです。平和の和は、のぎへんに口と書きます。のぎへんは麦や米を象徴するものですから、それを口にすることは、満腹ということです。満腹状態の中では基本的に争いは起きません。先ほど安全な食という話題が出ましたが、食はとても大事なことなので、それをぜひ公民館でやったらどうかと思います。食べることを通じて、地域の子どもと大人がつながっていきます。ご高齢の方がたった1人でご飯を食べるのではなく、週に何回かでも公民館でみんなと一緒に食事ができるようなプロジェクトはでき

ないだろうかと思います。仮に4年間限定であったとしても、学生が地域の公民館に顔を出し、その学生を地域の方が受け入れて地域の情報を提供する、自分の人生を語ってくれる、そのような交流の場を公民館が提供できればいいと思っています。私たち「学び、福祉、地域の支えあい」グループの「ごちそうさんプロジェクト」は、平和と、騙されない力と、つながり合う力、めげない意欲的な生き方につながるプロジェクトだと誇りに感じていいと思っています。これからも良い学びをし、日々高まる自分づくりのために、あちこちに顔を出して自分に新しい刺激を与える営みをしていければと思っています。

東 今日このワークショップの中で、皆さんいろいろなお考えがあり、いろいろな人がいらっしや、なるほどと思う気付きがたくさんありました。グループ内のディスカッションで、学生たちがやっている活動が外に見えにくいため「見える化」が必要ではないかという意見が出ました。それは実は、昨日行われた金沢学生のまち市民交流館の運営会議幹事会でも出た意見でした。皆さんが同じようなことを考えていることが分かり、今後、そちらの方に取り組んでいきたいとあらためて思った次第です。

また、金沢市も学生のまちづくりに取り組んでいますが、そこには、まちに大学と学生の力を生かしていくという面と、まちの皆さんで学生を育てていくという二面性があると思います。学生を育てていくことにおいては、もちろん勉強は大学の仕事ですが、社会のことはいろいろな活動を通じて地域社会が学生に教えていく、一緒に築いていく必要があるのではないのでしょうか。これからも、今日皆さんから頂いたご意見を参考にしながら、学生を通じたまちづくりを進めていきたいと思っています。よろしく願いいたします。ありがとうございました。

閉会あいさつ

横山 壽一

金沢大学地域連携推進センター長 教授

本日はありがとうございました。今日のテーマである世界の「交流拠点都市金沢」の実現に関して、山野金沢市長は、交流を通じて新しい価値をつくり出していくことを強調されています。今日の議論の中で、学生が地域に出掛けて行って地域と交流していくことが、金沢市を活性化させ新しい価値をつくり出していくための新しい柱の一つとして位置付けられるのではないかとということが、さまざまな側面から語られました。

しかし、今は制約があるためにその強みを十分に発揮できておらず、課題も多くあることが示されました。同時に、それを解決するための手立てや方向性も示されました。ここから先は金沢市の課題として検討していただかなければいけない部分もあり、大学が金沢市と協力しながら課題を整理し、プロジェクトを組んで課題にアプローチしていくという形で取り組めるものもあるかもしれません。そのような形で今日の議論を次につなげていきたいと思います。

大学と地域には、大学と行政だけではなく、今日ご参加いただいた市民の方も含まれます。これから大学が目指すべきことは、市民の皆さんにも入っていただき、一緒に考えていけるようなプロジェクトをつくっていくことです。今日ご参加いただいた方は、ここで出された課題に取り組んでいく際には、ぜひ引き続き協力していただければと思います。個別の課題もたくさん出されましたので、次の連携事業への課題として整理して取り組んでいきたいと思います。